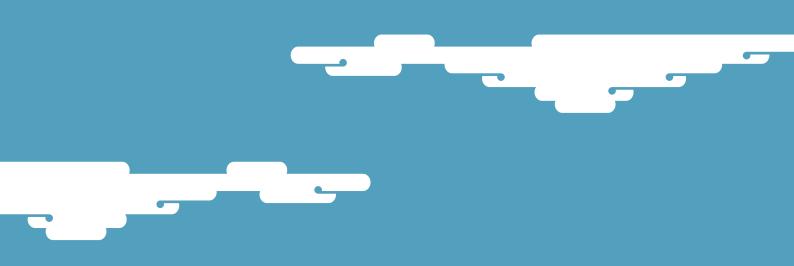


NEW ZEALAND WRITERS ENCOUNTER JAPAN ニュージーランドの作家が日本に出会う





要を味わう TASTE OF CLOUDS

TASTE OF CLOUDS 雲を味わう

New Zealand Writers Encounter Japan ニュージーランドの作家が日本に出会う

Published in 2022 by Academy of New Zealand Literature Te Whare Mātātuhi o Aotearoa

www.anzliterature.com

プロジェクトマネージャ | ポーラ・モリス 編集者 | ハーレー・ハーン 翻訳者 | ベル・貴子

デザイン | バチスカーフ

PROJECT MANAGER | Paula Morris

EDITOR | Harley Hern

TRANSLATOR | Takako Bell

DESIGN | Bathyscaphe

This book is copyright. Apart from fair dealing for the purpose of study, research or review, material may not be reproduced without the permission of the publisher.

TASTE OF CLOUDS TASTE OF CLOUDS

NEW ZEALAND WRITERS ENCOUNTER JAPAN ニュージーランドの作家が日本に出会う

| CONTENTS 次

| 著者 AUTHORS | | | | | | | | | | | | | |
|----------------------------------|----------------------------------|--|--|--|---------------------------------|--|-------------------------------------|--|-------------------------------------|-----------------------------|------------------------|--|--|
| ビビアン・プラム VIVIENNE PLUMB 5 | キルステン・ル・ハリヴェル KIRSTEN LE HARIVEL | | ヨ シ コ ・ テ ラ オ カ YOSHIKO TERAOKA | | シェボーン・ハーベイ SIOBHAN HARVEY | | ケリン・P・シャープ KERRIN P SHARPE | | PATI GR | パトリシア・・ゲレース RICIA ACE | ベン・キャンプ BEN KEMP | | |
| ヨンギー・ソオ YEONGHEE SEO 49 | | ・ ア ア デ オ ー マ ン JEFF PAPA HOLI | ジェフリー・パパロア・ホーマン JEFFREY PAPAROA HOLMAN | | カール・シュカー CARL SHUKER | | ジョアナ・エイチッソン JOHANNA AITCHISON | | コリーン・マリア・レニハン COLLEEN MARIA LENIHAN | | N E LLER | | |

日本とニュージーランドは、広大な太平洋 一古代ポリネシアではテ・モアナ・ヌイと呼ばれた一によって隔てられた、共にカーブを描いた形をした2つの列島です。 私たちの間に存在する距離は、地形的距離同様に、文化的歴史的な隔たりでもあります。ニュージーランドの国土サイズは日本と大きく変わりませんが、日本の人口はニュージーランドの25倍あり、都市はより高く、より広大で、人々とその物語が密集しています。

本書で紹介するニュージーランドの作家たちは皆、実生活で、ニュースで、親戚や先祖、友人を通して、あるいは想像の中で、日本に出会っています。 私達にとって日本の山々や海岸線は合わせ鏡で、火山の噴火や地震によってニュージーランドという国土の不安定な地質を自覚するのです。

ここに紹介する作家の多くは、教師として、学生として、研究者として、音楽家として、芸術家として、日本に滞在していました。彼らはしばしば、文学、映画、漫画、陶芸、現代音楽、歌舞伎といった日本の芸術の力に引き寄せられるのです。 パトリシア・グレースやジェフリー・パパロア・ホルマンのように、戦時中に敵とされた人々と感情的な探求をする者もいれば、カール・シューカーのように日本との「長い恋」を謳歌する人もいます。

ページをめくるたびに、皆さんは年齢、体験、視点、ディアスポラの歴史と、それぞれに違うニュージーランドの作家達を見いだすでしょう。マオリ族の作家であるパトリシア・グレースやコリーン・マリア・レニハンのほか、日本や香港、イギリスで生まれた作家もいます。 ニュージーランド人は、物理的な世界でも、想像上の次元でも、旅人なのです。私達にとって日本との出会いは出発点であり、それは別の場所を、または自分自身を見つめる様々な方法を示唆してくれるのです。

ポーラ・モリス MNZM

INTRODUCTION

Japan and New Zealand are two curved archipelagos separated by the vastness of the Pacific—Te Moana-nui, the great ocean, as it was known in ancient Polynesia. The distance between us is cultural and historical as well as geographic. And although our countries are not dissimilar in physical size, the population of Japan is 25 times larger than that of New Zealand, its cities taller and more sprawling, dense with people and their stories.

The New Zealand writers sampled in this publication have all encountered Japan—in real life, on the news, through relatives and ancestors and friends, or in their imaginations. In Japan's mountains and coastlines we see a mirror image of our own landscapes; in its volcanic eruptions and earthquakes, we see our own volatile geology.

Many of the writers here have spent time in Japan, as teachers or as students, researchers, musicians, artists. Often they are lured there by the power of Japanese art: literature, film, manga, ceramics, contemporary music, Kabuki theatre. Some, like Patricia Grace and Jeffrey Paparoa Holman, explore emotional connections with those defined as the enemy in a time of war. Others, like Carl Shuker, celebrate a 'long love affair' with Japan.

In these pages you'll find New Zealand writers of different ages, experiences, points of view and diasporic histories. Alongside Māori writers Patricia Grace and Colleen Maria Lenihan are writers born in Japan, Hong Kong or Britain. New Zealanders are travellers, both in the physical world and in its many imaginative dimensions. Our encounters with Japan are starting points, suggesting different ways to see another place, and our own.

Paula Morris MNZM

VIVIENNE PLUMB

ビビアン・プラム



バイオ

ヴィヴィアン・プラム(ニュージーランド/オーストラリアにルーツを持つ)は、詩、フィクション、ドラマ、クリエイティブ・ノンフィクションを書き、20冊以上の出版物を出しています。2008年、オークランド・シアター・カンパニーの依頼で、自身の短編小説『The Wife Who Spoke Japanese In Her Sleep』は2009年のオークランド・アート・フェスティバルで上演され自ら脚本を執筆しました。原作はプラムが日本語を学んでいたことがきっかけで創作された。演劇と物語は、変容というテーマを内包しています。2018年、プラム博士はクリエイティブ・ニュージーランド・ベルリン・ライティング・レジデンシーを開催し、2019年にはテ・ポウ・ムラムラを通して学校を巡回、2020年には、第二次世界大戦中に日本人捕虜収容所があったことから日本と縁のあるフェザーストンに移住しました。

謝辞

抜粋: 「寝言で日本語を話した妻」(オタゴ大学版、1993年)

冬の夜は長く寒い。ハニータルボットの家の中は 凍てついた真冬の夜に静まり返っている。少しづ つゆっくりと、ハニーはベッドの中で寝がえりをう ち、目を覚まし始める。彼女は日本語をしゃべり始 める。

「キョウ ハ サムイ デスネ」

「おやこれは一体。。?」ハニーは考える。

「オハヨ ゴザイマス」ハニーは大声で言う。声は寒い静かな寝室に響きわたる。ハニーの夫がうめく。

「んん、、、どうしたんだい?」

彼女は話すのやめた、しかし心はせわしなく動いている。私は何を言ったのかしら?ハニーは考える。彼女は自分が話した言語が日本語だとは分からないでいる。彼女は寝言で日本語を話した妻であった。

当初彼女はそこまで日本語の寝言を話さなかった。

夫のハワードはある晩起きていて、彼が目撃した 出来事について妻に語った。ハワードは妻がベッ ドに入るところを眺めており、ベッドに入った妻は だんだんと眠りについた。そして、1時間後妻はな にか別の言語を話し始め、それは少しの間で終わ った。

ある朝その話をハワードから聞いた時、ハニーは とても驚いた。彼女はいつでも良く眠り疲れと共 に目覚めることはなかったが、ハワードはしばしば 疲労困憊しているように見えた。

「君の寝言が気になってよく眠れないんだよ」ハワードは言った、

最初彼らはハニーの寝言が何の言語か全くわからなかった。夫も妻も英語以外の言葉を話したことがないし、ハニーは一回だけフィジー旅行にいったきり、ハワードに関しては一度の海外旅行の経験すらなかった。

ある晩ハワードはハニーの寝言をテープに取る ことにした。次の日、彼らは録音テープを近所の 言語学校に持って行き、講師への面談をお願いしたのであった。待合室で待っている間、二人は6匹の金魚が泳ぐ大きな水槽を眺めていた。

「タルボックスご夫妻ですか?」と講師が尋ねた。 彼女はメガネをかけ栗色のカーディガンを着て、 髪はぴったりと後ろに引かれ丸くまとめられてい た。ハワードとハニーには、彼女がとても知的に感 じられた。

「今日はどうされました?何を学習されたいのでしょうか?アラビア語でしょうか?スペイン語でしょうか?リトアニア語でしょうか?中国語でしょうか?私たちの語学学校では全て学ぶことができますよ。」

「まずこの録音テープを聞いて頂けないでしょうか?」ハワードは少し顔を紅潮させて、テープレコーダーのスイッチを入れた。

「ナン デスカ」テープの声が言った。それはハニーの声のようには全く聞こえなかった。「なんの言語なんでしょう?」ハワードは尋ねた。講師はテープの音を聞いていた。

「これは日本語ですね」 彼女は言い、更に聞き 耳を立て、そして笑った。「なんですかこれは」彼女 は言った。

「申し訳ないのですが」と講師は言った。「私は直訳することはできません、あなた方はこのテープをどこから入手したのでしょう?」

ハワードとハニーはお互いを見合った。

「そうですね、、、、」カップルは同時に言い、ハニーは自分の靴を見、ハワードは天井を見た。

「ちょっと待ってください」講師は言った。「今彼女、なんと言いました?」彼女は集中して録音テープを更に聞いた。「ワオ、信じられないわ。この女性は誰なのかしら?彼女に会ってみたい、とても素晴らしい女性だわ、この方きっと豊富な知識がある方のようだわ。」

「なぜそう思うのですか?」とハワードが聞き、椅子の上でもじもじと動いた。ハニーは金魚が水槽の中でひれを返しながら方向転換するのを見てい

たが、同時に講師が次に何を言うのか聞き耳を立 てていた。

「人類に関する講話ではありますが」講師は続けた。「一種の予言と言うか、、、一言では言い難いですね。」

彼らはお互いに見つめ合い、録音テープの音は 止まってしまっていた。

「彼女は物事についてしゃべっていて、なんというか、一種、巫女のようだわ。」講師は続ける。「私本当に彼女にあってみたいわ、お二人のご友人ですか?」

ハワードはくすくす笑い、ハニーは金魚を見ている。一匹のおおきな金魚が右側のガラスに近づき、ハニーに向けて口を開けたり閉じたりして、まるで「おやおやおや!」と言っているかのようである。

「その女性は私です」とハニーは平坦な声色で言った。「録音テープの声の主は私です」

「あなたなの?」と講師は言い明らかに驚いていた。彼女はメガネを外して磨き、改めてメガネをかけ直した。

「分からないわ。」講師は続けた。「もしあなたが日本語話者であれば、なぜ自分の言っていることが理解できないのでしょう?失礼であればごめんなさい、でも録音テープの声は貴方の実際の声と全く違って聞こえるわ。ハジメマシテ、ワタシハフロリカデス。ドウゾヨロシク。」講師はハニーに向かっておじきをした。

「やめて、やめて!」ハニーはつぶやき、後方に身を引いた。「私、あなたが理解できないわ、、、言ってハワード、一体何をしてるのかわからないって、、。」

「ハニーは夜寝ている時、あのようにしゃべるんです」 彼はテープレコーダの方をあごで指しながら言い、ミスフロリカは息をのんだ。

ハワードはミスフロリカに近づき、声を低めた。

「彼女は寝言を言うのですか?」ハワードは頷く。

「自分の知らない言語で?」

「そうです、私達にはどうしたらいいのかわかりま せん。」とハワードは続けた。

「彼女が何を言ってるか貴方にはわかりますか?」 ミスフロリカはハワードに尋ねた。

「テープの声は予言を告げています。彼女は我が国 の政府に関するいくつかの予想を述べています」

「まさか!」とハワードが言い、ハニーは目を逸らし た。羞恥心が沸き上り、来るんじゃなかったと思い 始めていた。

「私達が通常知覚できないことを感じるような超能 力があなたにはあるに違いないわ」ミスフロリカは そう言ってほほ笑んだ。

しかしハニーは「ハワード帰りましょう、家のヒータ ーをつけっぱなしだったことを今思い出したわ」と だけ言った。

ハワードはすぐに反応した。彼は一度もばか高い 電気料金を払ったことがないし、小銭もけちるタイ プだった。

「どのヒーターかい?大きいのかい、それとも小さ いのかい?」ハワードは帰りながらハニーに尋ね続 けた。

「ちょっとハワード、少し黙ってくれない?」ハニーは 言った。彼女は一人になりたくて浴槽にお湯をた めながら浴室に立てこもった。彼女はハワードが 公民館で行われる午後のクラスに出かけるまで浴 室から出てこなかった。ハワードはパッチワークの 作り方を学んでいる。彼は退職し何もすることがな かった。ハニー自身も、子供は大昔に自立し家を 出ており、趣味も娯楽も仕事もなかった、しかし今 彼女には、自分が知りもしない日本語で、眠ってい る間に神託を述べるという不思議な能力がある。

ハニーは自分の顔を鏡で眺めてみた。鏡の中に ブロンドで、背丈の小さい、ぽっちゃり体形の女性 が映る。小太りでまるまると肥えた体。彼女は頬の 肉をつまんだ。指を離すと、年を重ねてたるんだ彼 女のピンク色の頬に白い跡が残った。

彼女は超能力者について考えていた。

輪っかや宝石を身に着けスカーフを頭に巻き、人 目をひく芸術的な手振りと共に、上流階級のよう な話し方をする女性。ハニーはそのような女性達 を古いシャーロックホームズの映画で見た事があ った。薄暗い部屋の中に霊魂たちが現れ部屋を 埋め尽くし、その存在を示すように灯りやテーブル をひっくり返す、、、

彼女は超能力者なのかしら?

ハニーは笑い、自分の想像を否定するように頭を 振った。ブロンドの髪がふわふわと揺れ輝く。なん てバカバカしい考えなの!

はたまた新聞には、たまにそんな記事をみかける が、ある女性が警察から助けを求められ死体探し に協力したとかなんとか。「超能力者が警察を助 けた! 片手を前方に差し出し、目を閉じ、超能力 を使っているかのような女性の写真が、煽情的な タイトルと共に新聞の一面に踊る。その女性はハ ニーかもしれない?

彼女は大昔に学校で習ったデルフォイの予言者の ことも思い出した。女は神聖なる三脚の椅子に座 り、その下には深い大地の裂け目が開いている。 大地の裂け目から噴き出す霧が彼女をトランス状 態へと導く。そして彼女は人々に向けて神託を述べ 始めるのである。おそらくそれは何時間も続き、疲 労困憊の果てに予言者は倒れこみ、神官は彼女の メッセージを翻訳し人々に伝えるのだろう。人々は あらゆる場所から彼女の元へたどり着き神託を請 うのだが、その言葉は概ね正しいものであった。

ハニーは自分自身について思いを巡らせた。手に 目をやる。ちっとも芸術的ではないが、実用的では ある。ベッドに目をやると、光沢のあるピンクのナイ トドレスがロール状に畳まれて、枕の下に挟まれ ていた。今夜は一体何をしゃべりだすのかしら、と ハニーには予想もつかないのであった。

Vivienne Plumb

BIO

Vivienne Plumb (New Zealand/ Australian heritage) writes poetry, fiction, drama and creative nonfiction, with over twenty publications. In 2008 she was commissioned by Auckland Theatre Company to adapt her short story, The Wife Who Spoke Japanese In Her Sleep, into a playscript for the 2009 Auckland Arts Festival. The original story came about because Plumb had been learning Japanese. Play, and story, embrace a theme of transformation. In 2018, Dr Plumb held the Creative New Zealand Berlin Writing Residency, during 2019 she toured schools through Te Pou Muramura, and 2020 marked a move to the town of Featherston which bears links with Japan, as it was here that a Japanese P.O.W. camp was established during World War II.

ACKNOWLEDGEMENTS

Extract from *The Wife Who Spoke Japanese in her Sleep* (Otago University Press, 1993)

In the winter the nights become long and cold. In Honey Tarbox's house all is hushed on a frosty midwinter night.

Then slowly, slowly, Honey rolls over in her bed and starts to wake. She is speaking Japanese.

'Kyoo wa samui desu ne.'

'What...?' she thinks.

'Ohayo gozaimasu,' she says out loud. The words echo around the cold, still bedroom. Her husband groans,

'Huh, wozzat?'

She stops speaking but her mind keeps turning, rolling around. What did I say, she thinks. She doesn't know if it was Japanese. She is the wife who spoke Japanese in her sleep.

At first she didn't speak much Japanese.

Her husband, Howard, stayed awake one night and described what he saw happen. He watched her go to bed. Gradually she fell asleep, then after an hour she started speaking in another language. She spoke for a little time.

When she woke in the morning Honey was amazed to hear Howard's description.

She never felt tired. She was always rested, relaxed. But Howard often looked exhausted.

'The talking keeps me awake,' he said.

At first they couldn't understand which language it was. Neither of them had ever spoken any language themselves other than English. Honey had once gone on a holiday to Fiji but Howard had never travelled.

So one night Howard said he would tape Honey talking in her sleep. The next day they took the tape to the School of Languages which was very close by. They asked to see a teacher. While they sat waiting they watched six goldfish swimming in a large tank.

'Mr and Mrs Tarbox?' said the teacher. She wore spectacles and a maroon cardigan. Her

VIVIENNE PLUMB

9

VIVIENNE PLUMB

10

hair was pulled back into a bun. To Honey and Howard she looked very educated.

'How can I help? What would you like to learn? Arabic? Spanish? Lithuanian? Mandarin? We offer them all.'

'Please listen to our tape,' said Howard, his face slightly flushed. He switched on his pocket machine.

'Nan desu ka,' said the voice on the tape. It didn't sound like Honey at all.

'What language is that?' asked Howard. The teacher listened.

'Why it's Japanese,' she said. She listened some more, then laughed. 'Good grief,' she said.

'What is it?' asked Honey.

'Well it's rather rude,' said the teacher. 'I don't think I could give you a direct translation. Where did you get this from?' Howard and Honey looked at each other.

'Umm,' they both said. Honey looked at her shoes, Howard looked at the ceiling.

'Wait a minute,' said the teacher. 'Now what's she saying?' She leaned forward, concentrating on the tape recording. 'Wow, incredible. Who is this woman? I 'd love to meet her. What a wonderful woman she is. She seems to know so much.'

'Why, what did she say?' said Howard. He wriggled on his chair. Honey watched the fish flipping around the tank and waited to hear what the teacher would say next.

'Well it's a kind of speech about mankind,' said the teacher. 'Sort of prophecies...it's hard to describe.'

They all stood staring at each other. The voice on the tape had stopped.

'She says things. She's like a kind of...oracle,' said the teacher. I'd really like to meet her. Is she a friend of yours?'

Howard giggled. Honey looked at the fish. One really big goldfish swam right up to the glass, its mouth opening and shutting at Honey. 'Oh! Oh!' it looked like it was saying.

'It's me,' said Honey in a flat voice. 'That tape recording is me.'

'You?' said the teacher. She was obviously surprised. She took her spectacles off and polished them and put them back on again.

'I don't understand,' said the teacher. 'If you speak Japanese why don't you know what you're saying? Also, excuse me if I appear rude, but that voice doesn't sound like you at all. Hajimemashite. Watashi wa Florica desu. Doozo yoroshiku.' She bowed low towards Honey.

'No, no!' whispered Honey. She backed away. 'I don't understand you!...Tell her Howard. Tell her what happens.'

Howard moved closer to Miss Florica and lowered his voice.

'When Honey goes to sleep at night, she speaks like that.' He nodded his head towards the tape recorder. Miss Florica gasped.

'She speaks in her sleep?' Howard nodded.
'And in a language she doesn't understand?'
'Yes,' said Howard. 'We don't know what to
do.'

'But do you realise what she's saying?' asked Miss Florica.

'This voice on the tape is making prophecies. On the tape she made some predictions about the government of our country.'

'No!' said Howard. Honey looked away. She was feeling so embarrassed. She wished they'd never come.

'You must have a very special power,' said Miss Florica, 'to be able to perceive things that we cannot. A clairvoyant power.' She smiled at Honey.

But Honey said to Howard, 'Howard let's leave, I just remembered I left the heater on at home.'

Howard came straight away. He'd never encouraged large electricity bills. Was in fact quite a penny pincher when it came down to it.

'Which heater?' he kept asking all the way back. 'The big one or the little?'

'Oh, Howard, shut up,' said Honey. She withdrew to the bathroom where she ran a long hot bath. She didn't come out until she heard Howard leave for his afternoon class at the Community Institute. He was learning how to make patchwork. Now he was retired he had nothing else to do with his time. As for herself, the children had all grown up long ago. She had no hobbies, no pastimes, no job, but now she had this.

She looked at herself in the bedroom mirror. She saw a short, stout woman, with blond hair. A fleshy, plump body. She pinched the flesh on her face. When she pulled her fingers away, a white mark was left on the sagging pink skin.

She thought she knew what a clairvoyant was.

It was a woman, dressed with a scarf on her head, and wearing rings and jewellery. She had a rich plummy voice, and she waved her hands around in an artistic manner. She'd seen them in old Sherlock Holmes movies. The lights would be dimmed and then, the spirits would come. They would fill the room, knocking over lamps and tables in an effort to make their presence known.

Was she a clairvoyant?

She laughed. She shook her head and her blonde hair fluffed around her head like a halo. What a preposterous idea!

Or in the newspaper. Sometimes she'd seen them in the newspaper. A woman would be

called in to assist the police in finding a dead body. CLAIRVOYANT HELPS POLICE it would scream across the front page. And there'd be a photo of her, hand outstretched, eyes shut. Could that be Honey?

Or at school, many years ago. She remembered they had learnt about the Oracle at Delphi. A woman had sat on a sacred tripod over a deep fissure in the earth. The mists of the inner earth would rise and send her into a trance. Then she'd speak, tell everyone all manner of things. She might talk for hours, then collapse exhausted. A priest interpreted her messages. People would come from everywhere to ask her questions. And often her answers were correct.

Honey considers herself. Looks at her hands, not artistic, but capable. She glances at her bed, smoothly made, her fuchsia pink nightdress rolled up and slipped under the pillow. And she wonders what the night will bring.

VIVIENNE PLUMB

11



KIRSTEN LE HARIVEL

キルステン・ル・ハリヴェル



キルステン・ル・ハリヴェル

バイオ

カーステン・ル・ハーヴェルは、作家であり、プログラム・マネージャーであり、アオテアロア(NZのマオリ名)の作家にクラフト、コミュニティ、対話を提供するWriters Practiceの創設者でもある。また、NZSAのプロ育成イベントの運営にも携わっている。彼女のデビュー詩集『Shelter』は2021年にThe Cuba Pressから出版され、ヴィクトリア大学ウェリントン校でクリエイティブ・ライティングの修士号を取得しています。『Shelter』に収録されている3つの詩は、ル・ハリベルが日本居住時にエココミュニティで働いたり、北海道をサイクリングした経験からインスピレーションを受けたものです。現在はカピティコーストに若い家族と共に居住しています。

謝辞

Selected poems from the collection 『Shelter』 (Cuba Press, 2021). 詩集シェルターからの抜粋

短い名前の火山たち

自分が旅した土地を辿る。日本で、

あぶ山は暖かい唇に溶けた塩のきらめき、

あそ山は羽の感触。

うす山とざおう山は、窓越しにしたたる雨。

山の話をすると心地よい重みを感じる 一

熱と涼しげな煙幕。

祖国の山は古代の火山だ。

英語では、校庭の壁に向かってキャッチボールを している少年。

Ben Nevis、ベン・ネヴィスは丘の名前のよう。

土地の言葉で言えば、Beinn Nibheis。

もっと大きなものを想像する。尾を返し大波を起こ す

漂着したクジラや巨大な魚のような。

アオテアロアにはたくさんの山があり、今でも熱を帯びている。

私たちが到着した翌年ルアペフ山が噴火し、

灰がマナワツの広い空を覆った。

共同体の存在

タツヤは白壁の部屋の布団に横たわり、仕事着はタンスに掛けてあった。 私はパジャマ姿で彼を見ていた。古紙のような色になった彼の肌に手を滑 らせたかった。彼は私に、外に出て社会に貢献しなさいと言った。医者はタ ツヤに十二指腸に潰瘍があるので絶対安静にと言った。彼は仰向けで騒 いでいたが、血液がこんなにも集まり、彼を押し倒したままにしたことはなか った。別の男性が私をカボチャに豆藁を敷く作業に連れ立ち、彼をそっとし ておくように言った。タツヤは己の血が何を意味するか分かっていたが、私 には言わなかった。代わりに、タダチは私の家族に電話をかけた。私は殴ら れていた、と。私は殴られていなかったが、家族は知らなかった。家に帰ると 母は、彼の怒りは腸の中に蓄積し、2人の元妻が残した痕跡が私の顔にな かったのは幸運だったと言った。

甘い頬

最初は、コンピュータの前に座って

互いの理解できない部分を翻訳しようとした。

「あなたは幸運な気分になるでしょう」

「エコロジーは優しさの一種である」

「あなただから」

そういった言葉の、自分たちのバージョンを見つけたかった。

その代わり私たちはスクリーンを消した、

残りは手に任せよう

Kirsten Le Harivel

віо

Kirsten Le Harivel is a writer. programme manager and founder of Writers Practice which offers craft, community and conversation for writers in Aotearoa. She also manages the NZSA's professional development events. Her debut poetry collection Shelter came out in 2021 with The Cuba Press and she has an MA in Creative Writing from Victoria University of Wellington. These three poems from Shelter were inspired by Le Harivel's experience working in an eco-commune and cycling around Hokkaiko while living in Japan. She currently lives on the Kāpiti Coast, Aotearoa, with her young family.

ACKNOWLEDGEMENTS

Selected poems from the collection *Shelter* (Cuba Press, 2021).

Volcanoes have the shortest names

I trace the lands I've travelled on. In Japan,
Abu-san is a glimmer of salt dissolving
on warm lips, Aso-san, the touch of a feather.
Usu-san and Zao-san, the lick of rain through a window.
They have a pleasant weight when I speak them –
heat and a cooling cloak of smoke.

The mountain of my homeland is an ancient volcano. In English, it is a boy in the schoolyard playing catch against the wall. Ben Nevis, Ben Nevis sounds like a hill. In one of the land's tongues, it's Beinn Nibheis. It sounds bigger. More like a beached whale, or a giant fish, its tail flicked out, creating rifts and dips.

In Aotearoa, there are many maunga and they still carry heat.

Ruapehu erupted the year after we arrived,

ash clouding the wide Manawatū skies.

KIRSTEN LE

HARIVEL

16

Communal existence

Tatsuya lay on the futon in the whitewashed room, his work clothes hung in the wardrobe. I watched him in my pyjamas. I wanted to run my hand over his skin, now the colour of recycled paper. He told me to go out and serve the community. The doctor said he had an ulcer in his duodenum, that he must rest. He was on his back and full of noise, his blood had never gathered like this, had never pinned him to the ground. Another man took me out to spread pea straw on the pumpkins, told me to let him be. He understood what his blood meant, but he didn't tell me. Instead, Tadachi called my family. I was being beaten, he said. I wasn't, but they didn't know it then. Back home Mum said I'd been lucky the rage had cultivated in his intestines, and that my face was free of the imprints his two ex-wives had been left with.

KIRSTEN LE HARIVEL

17

Sweet cheek

In the beginning we sat in front of the computer and tried to translate each other's incomprehension. I wish we had managed to find our version of 'you will become a fortunate feeling', 'ecology is a form of tenderness', or 'you are the because'.

Instead we turned off the screen, let our hands do the rest.



YOSHIKO TERAOKA

ヨシコ・テラオカ



ヨシコ・テラオカ

バイオ

ヨシコ・テラオカは1992年に日本で生まれ、6歳の時に家族と共にロトルアに移住しました。オークランド大学で美術学士号(優等学位)を取得。彼女の創造性に富んだノンフィクション作品は、アンソロジー『A Clear Dawn: New Asian Voices from Aotearoa New Zealand』に収録されています。現在は大阪を拠点に、翻訳や書籍販売の分野で活動しています。

謝辞

エッセー「満足が猫を殺したが、好奇心が猫を連れ戻した」からの抜粋

あの日、ケンジントンハイストリートにあるジャパン ハウスロンドンで、控えめな日本人女性のグルー プが私に声をかけてきたとき、彼女たちの「コーヒ ーを一緒に飲みませんか という質問が、実は「洗 礼を受けませんか」という意味だとは思いもせず、 「YES |が別の「イエス |を導き、私は教会にいた 一 頭のてっぺんからつま先まで真っ白な服を着 て、教会の裏で聖水に浸かっていた ― 私の成人 した体は、30分前に会ったばかりの人から偶然の 洗礼を受けた。あの日、ケンジントンハイストリート にあるジャパンハウスロンドンで、控えめな日本人 女性のグループが私に声をかけてきたとき、彼女 たちの「コーヒーを一緒に飲みませんか」という質 問が、実は「洗礼を受けませんか」という意味だと は思いもせず、「YES」が別の「イエス」を導き、私 は教会にいた 一 頭のてっぺんからつま先まで 真っ白な服を着て、教会の裏で聖水に浸かってい た 一 私の成人した体は、30分前に会ったばかり の人から偶然の洗礼を受けた。

水中では時間がゆっくりと流れていく。

水の中で、真実が私を見つめ、私はそれを見つめ 返す。水の中で、自分が本当はどんな人間かを知 る。愚か者、ロマンチスト、皮肉屋、信奉者、子供。 水の中で、私は自分自身に戻る。2×2の洗礼プー ルの階段に足を踏み入れると、ターコイズ色の抽 象物が私の視界を満たした。両手を広げ、深呼吸 をする間もなく一ザブン! プールは今や、とめど なく広がる私の想像力を抱擁する海だ。子供の頃 の記憶が魚のように私の上を泳いていく。

母はいつも、私を琵琶湖湖畔の橋の下で見つけたと言っていた。幼い私はそれを事実として受け入れた。淀川と桂川は滋賀の琵琶湖を源流とし、父と母が生まれた場所、大阪と京都を流れる大きな川だ。一方の川はもう片方よりはるかに水が綺麗だが、広大で未知な海へと広がっていく前に、両方の川は合流し大阪湾へ流れ込む。

私はよく水に落ちた。水たまり、運河、プール、川。 衝動的に水面下から響く声、虚空の呼び声に反 応する自分がいた — 水の波紋で断片化され、多 重化された自分の姿に促されて、生まれ育った家 の近くにある田んぼの浅瀬に頭から転がり込んだ こともあった。琵琶湖の東端に位置するこの町では、田んぼの周りには水路が張り巡らされていた。 どうやってそこに行ったのか定かでない夢のよう に、水路に落ちるまでの経緯は不明だが、私の記 憶の中では、近所の人に漁網で掬われたことになっている。

南十字星に向かって海を渡り、私たち家族は日本の小さな町からニュージーランドの小さな町へと移った。ロトルア — 硫黄の街と呼ばれるこの場所は、地熱保護区であるティキテレがある。アイルランドの劇作家、ジョージ・バーナード・ショーはここを「地獄の門」と呼び、沸騰した地球を見て「これはまさに地獄の門ではないか」と己の無神論者としての信念に疑問を投げかけたと言われている。ヘルズゲートに行く必要もなくその存在は明らかだった。硫黄は銀を腐らせ、音響設備を破壊した。私たちはそれを吸ったり吐いたりして、自分たちが占めている不確定でグレーな領域を許容した。

ロトルア湖の対岸にあるロトルア聖書バプテスト 教会では、毎週火曜日の夜にアワナという子供向 けのプログラムが行われていた。私の父方の叔父 (プロテスタントの牧師)と母方の叔父(仏教の 僧侶)の間で、私たち家族は疑念と不確実性の 中一宙ぶらりんの状態で一快適に過ごしていた。 私は毎週火曜日の夜にアワナに行っていたが、神 様を半ば信じていたからではなく、そこにはダイジ ェスティブ・ビスケットと安っぽい薄いコーヒーが あることを知っていたからだ。メソジストでもバプテ ィストでも長老派でも英国国教会でも何でもよか った。興味と好奇心で教会に行っていたのだが、 それはまるで宗教的信念のバイキングにフリーダ イビングするようなものだった。10歳の頃にはあら ゆる組織化した宗教には免疫ができていた 一神 やイエスがキャンディやコーヒーに宿っていなけれ ばだが。

聖書の物語を読むのは楽しいが、夕食の前に教会のオープンスペースで「アヒル、アヒル、グース」をして自由に走り回ることほど楽しくワイルドではなかった。夜が明けると、子供たちは皆白いバンに乗り込み、教会の若い女性が一人ずつ家に送ってくれた。私は都合よく9時前に送ってもらった

ので、ソファに座って『サウスパーク』を見ることができた。これは純粋さと不敬なもののバランスをとるための私自身の浄化の儀式だった。後にニュージーランドの貧弱なMTV版ともいえる音楽チャンネルC4となったチャンネル4を見ることは、両親がほぼ離婚状態の移民で、根無し草のような状態で田舎町に住み、数枚のスクラッチカードと1枚のロトチケット以外には何も持たない私にとって、宗教的な儀式に近いものだった。

永遠に水の中にいられる、と思った。

ロンドンのプールでは、過去の記憶と共に身体が液化したように、私は泳ぎ漂ったーパニックから受容へ、絵になるリンゴの木とともに罰から恍惚へ。危うく誘惑され、啓示と自己消滅の2つの可能性が私の中で熱烈なスリルを煽った。教会には毎月洗礼のノルマがあるのだろうか?私はカルトに巻き込まれているのだろうか?コーヒーとケーキの約束に誘われて、裏切られた気分になったのだろうか?いや、そんなことはどうでもよかった。私は幸せだった。

BIO

Yoshiko Teraoka was born in Japan in 1992 and moved to Rotorua with her family at the age of six. She has a Bachelor of Fine Arts (Hons) from the University of Auckland. Her creative nonfiction work was published in the anthology A Clear Dawn: New Asian Voices from Aotearoa New Zealand. She is currently based in Osaka, where she works in the fields of translation and book distribution.

ACKNOWLEDGEMENTS

Extract from a personal essay 'Satisfaction killed the cat, but curiosity brought it back'.

It did not occur to me that day when the unassuming group of Japanese ladies approached me at Japan House on Kensington High Street, their question, 'Would you like to join us for coffee?' actually meant, 'Would you like to be baptised?' One 'yesu' led to another and there I was: dressed head to toe in bleached white attire, drenched in holy water at the back of a church house; my adult body was plunged into an accidental baptism by someone I'd just met a half-hour ago.

Time moves slowly when you're underwater.

In water, the truth stares at me and I stare back. In water, I see myself for what I really am: a fool, a romantic, a cynic, a believer, a child. In water, I return to myself. Entering the steps of the two-by-two baptism pool, the turquoise-coloured abstraction filled my vision. Arms outstretched, and before I could catch a deep breath—splash! The pool now a vessel for the wide expanse of my imagination. Childhood memories came swimming over me like fish in the sea.

Mother always told me she found me under the bridge by the lake. I accepted this as fact, for Lake Biwa is the source of the rivers, Yodogawa and Katsuragawa— two large bodies of water, in Osaka and Kyoto, which flow through the places where my mother and father were born. One is much purer than the other, but both bodies merge and flow into Osaka Bay before dissolving into the vast, unknowable sea.

I fell into water a lot. Puddles, canals, pools, and rivers. By impulse, I found myself responding to the call of the void, a voice that echoed from beneath the water's surface. Once compelled by my own reflection—fragmented and multiplied with the ripples of water—I tumbled head-first into the shallow waters of a

YOSHIKO TERAOKA

22

freshly planted rice field near the house where I grew up. A common feature in places with rice fields, waterways surrounded the streets in the town on the eastern edge of Lake Biwa. Much like the nature of dreams where one can't remember how they got there in the first place, the motions leading up to my fall one day in the waterway remains unclear, but in my memory, I was scooped up in a fishing net by a neighbour.

Moving across waters to the bottom half of the world, oriented by the Southern Cross, our family moved from one small town in Japan to another in New Zealand. Rotorua—dubbed 'Sulphur City'—is home to the geothermal reserve, Tikitere. The Irish playwright George Bernard Shaw called it 'Hell's Gate' and it is said that here, upon seeing boiling earth, he questioned his atheist beliefs, exclaiming that 'this could be the very gates of hell'. You didn't have to go there to know that it existed; it rotted silver and killed sound systems. We inhaled and exhaled it, and like that, we embraced the indeterminate, grey area which we occupied.

On the other side of Lake Rotorua, Rotorua Bible Baptist Church ran a program for kids called Awana every Tuesday night. Between an uncle on my father's side (a Protestant minister) and an uncle on my mother's side (a Buddhist monk), our family was comfortable -suspended-in the void of doubt and uncertainty. I went every Tuesday night, not because I half-believed in God, but I knew there would be Digestive biscuits and cheap, watereddown coffee. Methodist or Baptist, Presbyterian or Anglican, it didn't matter. It was with wonder and curiosity that I went to churches, like freediving into a smorgasbord of religious beliefs. Already by the age of ten, I was immune to any organised religion-unless God or Jesus resided in candy or coffee.

Reading stories from the Bible was entertaining at times, but not as fun and wild as running freely in the open space of the church playing Duck, Duck, Goose before our supper treat. At the end of the night, the kids would all hop into a white van and the young church lady would drop us off home one by one. My dropoff was conveniently timed at just before nine, so I could settle down on the couch to watch South Park—my own cleansing ritual to balance purity with the profane. Watching Channel 4, which later became New Zealand's poor version of MTV with the music channel C4, was as close to a religious ritual for an immigrant with almost-divorced parents, rootless and living in a rural town with nothing to hold onto except scratch cards and the little yellow ticket.

I could stay in the water forever, I thought.

In the London pool, as my body liquified with past memories, I swam and swayed—from panic to acceptance, punishment to ecstasy with the picturesque apple tree in the garden. Perilously seduced, the dual possibilities of revelation and self-annihilation kindled a warm thrill within me. Do churches have a monthly quota for baptisms? Was I involved in a cult? Did I feel betrayed for being lured with the promise of coffee and cake? Sure, but it didn't matter. I was happy.

YOSHIKO TERAOKA

23



SIOBHAN HARVEY

シェボーン・ハーベ



シェボーン・ハーベイ

バイオ

熱心な親日家である**ハーベイ**が日本に憑りつかれたのは、吉本ばななのキッチンを読んだ時に始まった。彼女の息子が、特にジョジョの奇妙な冒険という漫画に没頭し、そこから日本語を自主的に学び始めて以来、日本とハーベイのつながりは強まっていった。ハーベイは家族と日本を何度も訪れ、小津安二郎や多和田葉子、太宰治などの作家を好きな作家として数えていった。

謝辞

この抜粋は短編「黒い鶴」は東京とクライストチャーチという二つの都市が2011年に起きた地震で繋がっているという作りになっている。この短編は香港とオーストラリアの雑誌に掲載され、アメリカで賞を獲った。「黒い鶴」は以下の本に収録されてる、『Asian Literary Review 28』(Hong Kong) and 『Griffith Review 49』Griffith Review 49(Aus)and won the 2016 Write Well Award for Fiction (US)。

グレースの記憶は疲れ切っている。まるで地球が ぐちゃぐちゃになってしまったかのように、一つの 記憶が他の記憶と重なり、揺れが次の地震を予感 させる。地震が彼女の記憶を呼び覚まし、彼女自 身不安定になる。

彼女は全ての確証を失ってしまったかのように感じている。深い悲しみが彼女を包み、ケンと過ごした時間とケンが居ない今、まるで幾度も不幸が訪れるかのように、混乱、絶望が唸り声をあげている。

心の風景は正月の浅草寺と五重塔に変容していた。グレースとケンは雷門の外側に立っていた、人混みと線香の煙が立ち込めている。ケンはグレースの顔をなで優しくキスをした、それは堂々とした愛情表現であり、日本人らしくなかった。雷門の人混みは、ある者を着物で、ある者は仏像を抱え、門の下にどっと流れ込み、浅草寺に向かって進んで行く。ケンはグレースの手を取り浅草寺の境内まで連れていった。仲見世通りの明るいディスプレイの中に浮世絵やお菓子、ゴジラのおもちゃ、Tシャツがどんどん通り過ぎていく。グレースが次に気づいた時、彼女は黄金に輝く大仏前の大仏殿の中に建っていた。

• • •

もうすぐケンは大空に羽ばたく翼を手に入れる。 何週間も彼は飛行シミュレーターに座って練習していた。グレースはケンの試験の話を幾晩も聞き、 その話を聞く度に、グレースの中でケンははまるで 魔法の鳥(日本の鳥、キジかタンチョウ)に乗った 空想のキャラクターに仕立て上げられていくので あった。ケンは危険と隣合わせの奇妙な暗黒の世 界で魔法の鳥の乗り颯爽と操っている。グレース は眠れない夜を何度も過ごした。彼女の脳は覚醒 し魔法の鳥に乗ったケンのことばかり考え、心配 は消えなかった。もし飛行機乗りと結婚すれば彼 を想って眠れない夜が続くだろう。

最終試験の日の朝、ケンとグレースは上野公園で 会う約束をした。グレースは心ここにあらずだった が、彼女は語学学校でクラスメイトと、時制(過去 完了形と未来形)、節、不規則動詞、発音しない字、異音について話し、教室内を漂っていた。語学学校最後のクラスは終わり、彼女はピクニック用の敷物に座ったケンを公園で見つけた。キスを交わし、彼はグラスに入ったワインをグレースの渡す。まるでニュージーランドのような光景だ。

彼はグレースの空いている方の手をとり黒い折り 鶴を手の平の上に置いた。折り鶴の背の上でダイ ヤの指輪が夏の日差しの下で輝いている。もちろ んグレースの答えはイエスだ。彼らは結婚し、結婚 生活は折り鶴の巣となった。ケンが海外のフライト に行くとき、新しい折り鶴をグレースの枕や冷蔵 庫、歯ブラシの横に上に置いていった。いつもケン の折り鶴は黒で、一メタリックインクでぼんやりと 書かれた字で一愛してると書かれていた。ケンと グレースがクライストチャーチに引っ越した時、折 り鶴達も一緒に引っ越した。グレースは彼らを寝 室に飾った。ケンが赤ん坊のためにお使いに出た 時、折り鶴は開いた窓から入ったそよ風に揺れ、さ わさわと音を立てた。その日は典型的な火曜日の 朝だったが、ケンは二度と戻らなかった。30分後、 激しい揺れが突然グレースを襲い、まるで折り鶴 のように軽く、心もとない存在となったグレースの 体は無造作に床に放り出された。

Siobhan Harvey

BIO

An avid shinnichi" (親日), **Siobhan Harvey's** fascination with all things Japanese began when she read the Banana Yoshimoto novel, *Kitchen* in 1993. Her son's self-teaching of the Japanese language and his addiction to manga, particularly Araki's *JoJo's Bizarre Adventure* have strengthened Harvey's engagement with Japan. She has visited the country with her family on numerous times and counts the works of filmmaker, Yasujirō Ozu and authors Yoko Tawada and Osamu Dazai (Shūji Tsushima) among her favourites.

ACKNOWLEDGEMENTS

SIOBHAN HARVEY

28

This extract from the short story 'Black Origami Birds' is set in Tokyo and Christchurch and involves connections between both communities, particularly around the 2011 quake. It was previously published in *Asian Literary Review 28* (Hong Kong) and *Griffith Review 49* (Aus) and won the 2016 Write Well Award for Fiction (US).

The way Grace's memories overlap is draining. One recollection folds into another, just as, each time the earth crumples these days, one quake signals the next. So destabilising, like the way current events merge with the past in her mind. She feels she is robbed of every certainty. Even her grief is an ongoing envelopment of her existence, its history with Ken and its present without him in which, like a bad accident visited over and over again, turmoil, confusion and despair snarl.

The landscape of her mind morphs into the pagodas of Senso-ji Temple. It's New Year's Day, the oshogatsu festivities. Grace and Ken stand outside the Thunder Gate, a crowd about them, the smoke of collective breath fusing with burning incense. Ken strokes Grace's face, places lips gently upon her. A moment's tenderness, so brazen, so un-Japanese. Afterwards, the crowds - some wearing kimonos, some holding ancient Buddhist icons - surge through Thunder Gate and start their march into the Temple. Ken seizes her hand and leads her into the Temple grounds. Nakamise-dori's bright arrangement of stalls selling woodblock prints, sweets, Godzilla toys and T-shirts flashes past. The next thing Grace knows she's standing in the Great Hall before the golden statue of Kannon, Goddess of Mercy, which radiates warmth like a halo.

• • •

Soon Ken will be awarded his wings.

These are the weeks during which he sits numerous examinations in a flight simulator. And these are evenings during which Grace listens to her lover discuss his assessments, her mind picturing him as a character trapped in a fantasy, a boy aboard a magical bird (something Japanese - the green pheasant or red-crowned crane). Each time a drama unfolds, Ken an avian jockey navigating a creature through surreal, black space and a series of equally illusory dangers.

These are also nights during which Grace awakes in darkness, her brain turning over again with these chimerical impressions of Ken as she worries whether this is what it means to be married to a pilot, one's life and sleep shadowed by recurrent jeopardy.

The morning of the final appraisal, Ken and Grace agree to meet later in Ueno-Koen. Grace floats through classes at the language school, speaking to her students about tenses (the pluperfect, the future), clauses, irregular verbs, silent letters and allophones, while her mind drifts somewhere else: with Ken and his dreams of taking to the air.

Her last class dismissed, she discovers him sitting on a picnic blanket on a verge in the park. They kiss, then he hands her a glass of wine, something distinctly New Zealand. He takes her free hand and lays a black crane in it. The origami bird sits beneath the summer light sparkling with the single diamond ring it bears on its back.

Of course Grace said, 'Yes'.

Once they're married, their home becomes a nesting site for paper birds. Whenever Ken leaves for LAX, Chek Lap Kok or Heathrow, he leaves another crane on Grace's pillow, in the fridge or next to her toothbrush. Always, his cranes are black and inscribed – the faintest peck of metallic ink pen upon paper – with the word aishiteru. When Grace and Ken move to Christchurch, the birds migrate too. Grace hangs them in the master bedroom. The window ajar, they rustle furtive as a secret even when Ken leaves to do some light baby

shopping on an otherwise ordinary Tuesday morning, never to return.

Half an hour later, there is such a shuddering, Grace becomes something paperlight and folding.

The next thing she knows her body is a rumple upon the floor.

SIOBHAN HARVEY

29



KERRIN P SHARPE

ケリン・P・シャープ



32

ケリン・P・シャープ

バイオ

ケリン・P・シャープは4つの短編集を出版している。 彼女の作品は『Best New Zealand Poems and in Oxford Poets 13』(Carcanet Press UK) and POETRY (USA) 2018に掲載されている。2020年、アルパイン・フェローシップ・ライティング賞の最終選考に残り、2021年にはマイケルキングライターズセンターサマーレジデンシーを受賞しました。これらの詩を書いている間、シャープはNZで英会話を教えていた日本人家族を思い出す。彼らは親切で優しい人達であった。またシャープは2011年の津波の後、津波にさらわれた妻を探すためにダイビングを習った日本人男性について思いを馳せる。

謝辞

「津波が去った後潜水士になった男」以前に公開されました。『Louder』(Victoria University Press, 2018年)。「田植えする人々1953」以前に公開されました『There's a Medical Name for This』(Victoria University Press, 2014年); 以前に公開されました『Oxford Poets 13』(Carcanet UK, 2013年)。

田植えする人々1953

急勾配の石畳の道 豊作祈願の神社に続く

馬の歩みはお茶が沸かせる程鈍い

ウマの飼い主は蓑を脱いで 低い木に登る

このまだ結婚してない口笛吹きはいけばなのように米の苗を植える人々に

もうすぐ多少なりとも苦労が報われると 知らせてまわる

津波が去った後潜水士になった男

幽霊の波 赤い旗が沈む場所

幽霊の波 からっぽの家、会社、干物工場

幽霊の波 干からびた海鳥の死体

幽霊の波 人々の片足を奪う

銀行員の妻を探して彼は毎日静かに海に沈む

今日は6日目 今日は2190日目

最後の携帯メッセージ

主任に

屋根に上るように言われた

全ての影が彼女に見え、 全ての静けさが彼女を思い出される

カチカチカチ 空気ボンベの残量と過去の時間が重なる

幽霊の波の下 彼女は見つからない

他の誰かが彼の腕の中を漂う

Kerrin P Sharpe

BIO

Kerrin P Sharpe has published four collections of poetry (all with Victoria University Press). She has also appeared in *Best New Zealand Poems* and in *Oxford Poets 13* (Carcanet Press UK) and POETRY (USA) 2018. In 2020 she was shortlisted for the Alpine Fellowship Writing Prize and in 2021 she was awarded a Michael King Writers Centre Summer Residency. In writing these poems she remembers a Japanese family she met in NZ who she tutored in conversational English. They were kind and gentle people. She also remembers the story about the Japanese man who after the 2011 tsunami learned how to dive so he could search for his wife lost in the sea.

KERRIN P SHARPE

34

ACKNOWLEDGEMENTS

'after the tsunami the diver' was previously published in *Louder* (Victoria University Press, 2018). 'the rice planters 1953' was previously published in *There's a Medical Name for This* (Victoria University Press, 2014); also published in *Oxford Poets* 13 (Carcanet UK, 2013).

the rice planters 1953

on the steep stone path

to the rice shrine

the tea-bag horse

stops often to turn

the kettle on

his master removes

a straw jacket

to climb a tiny tree

this whistling bachelor

reminds the ikebana

rice planters the slow

moon will cross their palms

with the shadows

of pale fish



after the tsunami the diver

waves of ghosts red flags where they sank

waves of ghosts hollow bones of houses offices dried fish factories

waves of ghosts shrunken heads of marine birds

waves of ghosts some on single legs

waves he daily dives like a low sinking moon in search of his banker wife

now six years now 2190 days

her last text

our manager orders us to lie on the roof

any shadow could be hers any silence the space between her eyes

the *tick tick* of his tank flicks through this calendar their life together

even under the waves ghosts arrive without her and hang around him and float into his arms kind like strangers

KERRIN P SHARPE



PATRICIA GRACE

パトリシア・グレーフ



パトリシア・グレース

バイオ

パトリシア・グレースは最も卓越した著名なマオリフィクション作家の一人で現代ニュージーランド文学の一番手である。グレースは「Potiki」(1987)でニュージーランドブックアワードフィクションの部で賞に輝き、「Dogside Story」(2001)でマンブッカープライズの候補に名を連ねた。この小説はキリヤマパシフィックリムフィクションプライズ(2011)でも賞を取った。更にフィクション小説「Tu」でモンタナニュージーランドブックアワードでドゥーツメダルを獲得し(2015)ヌースダット国際文学賞も受賞している。(2008)グレースは異文化の衝突と願望を小説「デパート」の中で探求した。この小説は若い男性が彼のマオリの祖父と日本人の祖母のラブストーリーを発見する物語である。

謝辞

抜粋:デパート (Penguin Random House, 2015 年)

停泊港は横浜だった。東京に出るには電車に乗る必要があったので、石井がくれた地図には大いに感謝した。地図には英語の説明書きと、駅へ連れていってくれるであろうタクシー運転手、チケット売り場の人、私にプラットフォームがどこか教えてくれるであろう誰かへの指示が日本語で記されていた。

混雑した電車は工場、マンション、商店街、神社、デパート、その隙間を埋める小さな木造の家の中を通り過ぎる。人々はその中いたるところ隅々に存在し、それが強く印象に残った。

電車から降り東京駅に着いた。そもそも見つける のが難しいとは思っていなかったが、大混雑する 駅の人混みが切れその中からプラットフォームの 端にいるチャッピーの姿が現れた。

真っ先に出来る事と言えば、やせこけたチャッピーの体を両腕で包み、涙でチャッピーを濡らす事だった。その様子は、まるで私がたまにチャッピーのために持ち歩いていた竹の棒を固定するバンドのようだった。私達は言葉を交わさなかった。タクシーは、過去の戦争で徹底的に破壊された都市の中を走り抜けていく。東京は太平洋戦争で何度も空襲に遭ったのだが、新しく建てられた都市はモダンで生き生きとし急成長中だった。

目的地の公園には沢山の曲がりくねった歩道が通り、淡い色の大きな湖があった。町の喧騒が去った 後、公園の中には岩の静けさだけが佇んでいる。

私たちは腰を下ろした。

非日常的な日本語の世界から抜け出し、私たちが通常話す言葉や記憶を取り戻した後、チャッピーが私に語った話は、母国アオテアロア(ニュージーランドのマオリ語表現)を出発し日本へ至る物語であった。荒廃した東京で2年間がれきの撤去作業に従事し、今は東京の旧市街に住みつき工場でラジオを作っているという。休日には電車で横浜に行き港に船の入港の様子を、いつか私がチャッピーを見つけにくるだろうと信じて眺めていた。しかし彼は代わりにモーに出会った。

チャッピーにニュージーランドに帰国する可能性について言及すると、彼は返答を拒んだ。私自身、彼が私と連絡を取りたがっていると思っていたことは、実はそうではなく、彼自身がニュージーランドに残された妻や子供達の元に戻るという希望を捨ててはいないからだ、という事に気付いたのだった。

しばらくの間、公園の歩道を歩きながら話をした。 湖には様々な種類の水鳥達が漂い、鯉と亀が突 然に現れ湖面の静けさを破るのだった。

もう一度私の兄弟が家族の元に帰りたがらない 理由を探そうとした。

「日本は愛されていない。」チャッピーは言った。 「東京で仕事がある。東京を立て直すのに力を 貸さないといけない。」一旦言葉を止め、彼はほほ 笑んだ。「だけど僕は、姉さんとその弟である僕自 身に会えて嬉しいよ。」

今私に出来ることは何だろう。船に戻る時間が来ていた。オリウィア(オリビアのマオリ読み)に何といえばいいのだろう。逡巡する私にチャッピーはオリウィアにと小包を渡したのだった。

Patricia Grace

BIO

Patricia Grace is one of New Zealand's most prominent and celebrated Māori fiction writers and a figurehead of modern New Zealand literature. She won the New Zealand Book Award for fiction for *Potiki* (1987) and was longlisted for the Man Booker Prize for *Dogside Story* (2001), which also won the Kiriyama Pacific Rim Fiction Prize (2001). She received the Deutz Medal for fiction for novel *Tu* at the Montana New Zealand Book Awards in 2005 and the Neustadt International Prize for Literature in 2008. Grace explores cross-cultural conflicts and the desire to belong in *Chappy*, which is about a young man discovering the love story between his Māori grandmother and his Japanese grandfather.

PATRICIA GRACE

40

ACKNOWLEDGEMENTS

Extract from *Chappy* (Penguin Random House, 2015).

The docking port was at Yokohama. I needed to take a train to central Tokyo and was grateful for the map given to me by Ishy. It had instructions for me in English as well as directions in Japanese for the taxi driver who would take me to the railway station, the attendant who would sell me a ticket and the stranger who would show me my platform. I was aware of people. People everywhere as I boarded the crowded train that took us through a concrete landscape—factories, apartments, teeming shopping centres, temples, department stores. Here and there were little wooden houses sitting among it all.

I stepped from the train at Tokyo station, knowing that, despite the throngs, I would not be difficult to find. At the end of the platform, blocking my way while the hordes moved around us, was Chappy.

All I could do at first was wrap my arms around his emaciated body and let tears drip on him. It was like holding a bundle of his bamboo sticks that I used to carry for him sometimes, and just as rattly. We didn't speak.

Another taxi driver sped us through the town, where I expected to see evidence of the destruction of a city. I knew Tokyo had been bombed over a hundred times during the course of the war. What I saw was a new city, a rebuilt city, a modern city, alive, burgeoning.

We arrived at a public garden, a restful place of soft colour by a large lake where pathways went in many directions. After the noise of traffic and bustle of people there was the quiet stillness of rock.

We sat.

The story Chappy told me, after we'd found our way back into our common language and common memories, was the story of his deportation from Aotearoa and his arrival in Japan. For two years he had lived in the ruins of Tokyo, working at shifting rubble, and was

now living in the old part of the city, working in a factory making radios. When not working he would take a train to Yokohama and watch the boats come in, believing he would find me one day. He found Mo instead.

When I tried to talk to him about returning to New Zealand, he wouldn't respond. Although he had wanted to get hold of me it was not, I soon found out, with the hope of being able to return to his wife and children. I did my best to find out his reasons, but all he would say, in a roundabout way, was that it wasn't for the best.

We stood and walked for a while. Carp and turtles broke the surface of the lake. Different kinds of water birds cruised about. I spoke to him of home and family as we made our way out of the park and on to a little crowded restaurant where Chappy ordered bowls of seafood and vegetables that had been dipped in batter, deep fried and seasoned with black sauce and radishes. It was good. I hadn't eaten since I left the ship.

Once again I tried to discover the reason for my brother's reluctance to discuss a return to his wife and family.

'Japan is not loved,' he said. 'In Tokyo I have work. I must help rebuild Tokyo.' He paused. He smiled. 'But I'm happy to see you. You and your little brother.'

Where did that leave me? It was time to return to my ship. What was I to say to Oriwia? He gave me a parcel which I was to take to her.

PATRICIA GRACE



BEN KEMP

ベン・キャンプ



プ **44**

ベン・キャンプ

バイオ

ニュージーランド出身のベン・キャンプは10年間東京に住み、そこで伝統美術と文化を吸収した。そこで彼は歌舞伎、日本映画、日本文学への情熱を発見した。ケンプは彼が日本で結成したウマナリで3枚のアルバムを日本、オーストラリア、ニュージーランドでリリースした。キャンプの芸術活動は日本とポリネシア/マオリ文化との関連性を探った。ケンプは90年代の後半、ローリーハビブ(卓越したマオリ作家の1人)との師弟関係を築いた。ケンプはハビブの自己研鑽された芸術家になるためのアプローチから着想を得え、作家としての"信頼の必要性"についてハビブを参考にしている。ケンプの最近のインスピレーションはパプアニューギニアの新生活の中における日常と異国情緒から引き出されている。

謝辞

「ジャパニーズ モコ」と「戦士の二つの肖像」 以前に公開された『New Poets AUP 6』 (Auckland University Press, 2020 年)

ジャパニーズ モコ

鼻筋

一筋の血

土製のティーポッド横に使われなくなった骨のノミ

クマラ(さつまいものマオリ読み)の庭 夜空の下 戦士のしわの影と侘寂の瞳

カラスたち 黒い羽根に包まれた インクの河によって描かれた階段状になった泥のフロア

旅

馬の背に乗って行く埃っぽい道 トゥマタウエンガ(マオリ神話の神)のコメ畑の中 畑を耕す神様

ランガティラ(島の名前)は飲み込む 緑茶をフラックス(ニュージーランドの固有植物)の谷で 切り取られた風景は、成長する魂のマニフェスト

戦士の二つの肖像

パート1: みやもと

赤松と桃の花の香りに満たされる 1584年の播州 弁之助にカッコーは歌う

短気な赤子は背の高い男になり 二刀使いの「二天一流(一つになった2つの天)」を編み出した

佐々木小次郎に死の影が忍び寄るが 日光で気づかない 木刀の、鋭敏な最後の一振りが燕の尾を切断する

紺

色即是空

経験に担保された迷いの無い主観の層と無の融解

1645年 霊巌洞 目を細め 帯をきつく締めあげる 左手に刀 片方の膝は直角に天を仰いでいる

パート2: テコーティ(マオリの戦士)

1830年の光景 一つの死、一つの生 アワプニ礁湖の暗い反射、テ・トイロア・リキランギ(テコーティの別名)、馬商人と船乗り

海岸の雨

怒りに満ちた目とこわばった唇 ケレル(ブッシュピジョン)へ向けられた顎、ウレウェラ(土地の名前) 無精ひげを蓄え森の中で眠る

軌跡

穢れ無き女と子供らを、復讐、斧を振る 誰かがささやく「船に乗れ!」

片手をあげ(リンガトゥ教のおける宗教的所作) リンガトゥ神に誓う 古代ユダヤ人の炎 あるハウハウ信者がヤコブの食卓につく

「ピネピネテクラ(マオリ民謡)」、1893 頑固な日光の下日陰に誰か座っている 最後の讃美歌、最後の歌 不正義の歯が鈍る、予言者は力を失った

Ben Kemp

BIO

NZ born **Ben Kemp** lived ten years in Tokyo where he absorbed traditional art and culture, and discovered his passion for kabuki theatre, Japanese film and literature. Kemp also toured with his Japanese band Uminari, releasing three albums in Japan, Australia, and New Zealand. His work often explores the nexus between Japanese and Māori/ Polynesian culture. Kemp developed a close mentor-student relationship in the late 1990s with Rowley Habib, one of New Zealand's pre-eminent Māori writers. Habib inspired Kemp with his disciplined approach to being an artist, often citing 'the credence required' of a writer. Kemp's latest inspiration is drawn from both the ordinariness and exoticism of his new life in Papua New Guinea.

ACKNOWLEDGEMENTS

'The Japanese Moko' and 'Two Vignettes of a Warrior' were previously published in *New Poets AUP 6* (Auckland University Press, 2020)

The Japanese Moko

The ridge over his nose yields a trickle of blood, the bone chisel at rest beside an earthen teapot.

In kūmara garden, and under night's sky, the wrinkled shadow of this warrior, with one wabi-sabi eye.

Crows.

feathered in melanin, and contoured by rivers of ink that cascade to a clay floor.

A journey, dirt track by horseback, in rice fields of Tūmatauenga, the Kami-sama with a muscle to plough.

Rangatira drinks, in a valley of flax and green tea, this hewed vignette, as the manifesto to his curved soul.

BEN KEMP

Two Vignettes of a Warrior

PART 1: MIYAMOTO

Suffuse the scent of a peach blossom amid red pines.
In 1584, Banshu,
a cuckoo sings Bennosuke

A baby with irritable skin builds the tall man, a vision of two swords, Niten Ichi 'two heavens as one'

The dead follow Sasaki,
blinded by sunlight,
the last swish of a wooden sword, bokken that severs the swallow's tail

Of Zen,

no blue, no sky, unravelling subjective layers of experience, and dissolve into emptiness

Cave Reigandō, 1645,
squints an eye,
then rises to tighten his belt,
in his left hand, *katana*,

PART 2: TE KOOTI

with one knee raised vertically to heaven.

A vision in 1830, of one death, one birth, a dark reflection in Awapuni lagoon, Te Toiroa Rikirangi, the horse trader and sailor

> Coastal rain, a raged eye and taut lip, chin to the bush pigeon, Urewera his scrub beard asleep in the undergrowth

Inside the arc the immaculate heads of women and children, utu, swings the tomahawk so softly spoken 'ko ana ki te poti!'

Upraised hand bade unto God, Ringatū the Israelites' phosphorus flame, a Hauhau disciple to hāngī at Jacob's table

'Pinepine te kura', 1893, in shade beneath an unyielding sun, the last psalm, the last waiata, the tooth of injustice is blunt, the prophet extinguished. BEN KEMP



YEONGHEE SEO

ヨンギー・ソ



ヨンギー・ソオ

バイオ

ヨンギー・セオは香港生まれの学生、ライター、パフォーマー、アーティストです。幼い頃ニュージーランドの小さな町にやってきたセオは、奇想天外でファンタジーに満ちた物語を好み、日本のアニメやグラフィック・ノベルを貪欲に吸収しました。高校の交換留学で日本に滞在した経験は彼女の表現者としての基礎を形作り、様々な表現活動の一部を短編小説「WHAT IF HE LOVED ME」の中で試みています。彼女の作品は、2021年の作品集「A Clear Dawn: New Asian Voices from Aotearoa New Zealand」に収録されています。

謝辞

「もし彼が私を好きだったとしたら」からの抜粋。

初恋は14歳の早春に訪れた。彼は私のタータンチェックのスカートと汗で汚れた白いシャツを見て、私のことを大人っぽいと評した一あの時は気づかなかったけれど、確かに初恋だった。

ニュージーランドでいうところの春は10月だが、日本では秋、はたまた夏の終わり。東京では10月に入っても台風が名残を惜しみ、耐えられないほどの蒸し暑さが続くことがある。

京都の日差しは、ニキビが増えると日焼け止めを 塗らなかった私たちの肌を痛めつける程度には強 かったと思う。とはいえ京都でのひと時は春の恋 みたいなもので、私たちはニュージーランドの春ー 日本の秋の中をどたばたと過ごして、ポフツカワ・ クリスマス(訳者注:ポフツカワはNZの固有植物 でクリスマス近くに赤い花をつける)に向かって突 進し、春の後押しで小さな一歩を踏み出した恋は ピークに達したのだった。今考えると時差ぼけして いただけだったのかも。

私たちの恋の始まりは、日本旅行の最初の週末、私と他の学生たちがホストファミリーを東京に残し、新幹線で古都に向かっていたときだった。私は引率チームの大人達の会話にうまく入り込み、フェイスブックのプロフィール写真の「いいね!」の数について冗談を言ってみたり、自分の珍しい多文化的な生い立ちについて話し、また彼についても強い関心を表してみたりした。彼は、少し驚き少し関心を示しながら、秘密の誕生日会への招待状みたいな言葉を私に送り、私はそれを謙虚に受け止めた。「大人っぽい」は馴染みのある褒め言葉だった。

大人っぽい一私がまだTゾーンが脂ぎったおかっぱ頭で、両親のディナーパーティーでは「小さなウェイター」だった頃。週末は兄が持っていたナルト、ホリデイ中はポケモンゲームで遊んでいた頃。進撃の巨人みたいなアニメを見てひるなかの流星みたいな漫画を読んで、Youtubeのコメディのボイスオーバーを親友と一緒に完璧に歌い上げてたあの頃。最後の1つは、日本旅行中最初の頃彼を感心させようとやった事。後日ベッドの中で彼はあの時一度私を子供っぽいと思ったと言った。まあそうだよね。

整列し土産屋や神社を訪問する私達一行は、京 都の行く先々で注目を集めた。制服を着た7人の 女の子と7人の男の子が、見るからに白人の大人 4人に連れられて街を練り歩く。ミラマーの兄弟校 みたいな所から来たH氏(後にオリと呼ばれるよう になった)は少年たちをまとめる役割で、ジョーと レオはその学校を卒業したばかりののんびりとし たH氏の補佐役だった。L氏またはショーンは、NZ と日本のつなぎ役で旅行中ずっと同行してくれた ツアーガイド。ミセスVは正式な兄弟校から派遣さ れた、喜びを奪い不幸を振りまくのが仕事ではな いかと思われるような人だった。私たちは彼女をフ アーストネームで呼ぶことすら許されなかったし、 引率の大人の中で最も異彩を放っていた。眉をひ そめた白い肌、冷たい青い目、そして(おそらくブ リーチ&ブローした)ケバい黄色の髪。今にして思 えば、彼女は私の最終的な救世主と言えるかもし れないけど、当時の私は彼女を悪役、つまり覆面 のアンブリッジ(訳者注:ハリーポッターの登場人 物)と考えていた。彼女を除いて、旅行に参加した 全員が最初の週の終わりにはフェイスブックで友 達になっていた。

14人の生徒達。イケてる子とイケてない子女子男子が混ざり合い、思春期の若者達がいつの間にか家族のような関係になっていた。その中には永遠の親友、協力的なカムと母親みたいなエレインも含まれていた。京都では3人で宿泊部屋の模様替えに勤しみ、マットレスを移動してパジャマパーティーを開催した。三条会の商店街の自由行動では日本にしかない小物を見せ合うために灼熱の中を駆け回った。

カムはこの頃、すでにミラマーの男子生徒の一人に恋心を抱いていた(というか、旅行初日既に先生に色目を使っていた)。彼は(今でもそうだと思うけど)優しくて面白い背の高い男の子で、アニメや漫画も大好きだった。ある商店街のアーケードでカムと私は、カムがリヴァイ船長のフィギュアをUFOキャッチャーでゲットするのに大いに盛り上がった。これで集合時間に遅刻し、慌てて市場を駆け抜けようとして、迷宮のような商店街に迷い込んでしまった一だけどこれも、私達がそうしようと思って選んだ物語のバージョンだったのだのか

もしれない。私は時々、実際に起こったことよりも、過去に自分が言ったことにかくとを思い出す方が簡単だと思うことがよくある。いずれにせよ、ミセス Vはひどく怒っていた。オリイは無関心に見えたけど、とにかく遅刻の言い訳をしないといけなかった。想像力豊かで頭の回転が速い私が出来たことは「申し訳ありませんでした」と公言し、汗ばんだ眉を恥ずかしそうに下げることだけだった。この話を覚えているのは、カムがボーイクラッシュの結果リヴァイのフィギュアを私にくれたからだ。この2っだけが京都の記憶として残っている。

Yeonghee Seo

BIO

Yeonghee Seo is a student, writer, performer, and artist. Born in Hong Kong, she came to small-town New Zealand as a young child and fuelled her appetite for outlandish, fantasy-filled narratives with Japanese animations and graphic novels. Her time spent in Japan on a high school exchange program was a formative experience for her in many ways, some of which she explores in her short story, WHAT IF HE LOVED ME. Her writing is included in the 2021 anthology, *A Clear Dawn: New Asian Voices from Aotearoa New Zealand*.

ACKNOWLEDGEMENTS

YEONGHEE SEO

Excerpt from 'WHAT IF HE LOVED ME'.

52

It was in the early spring of my fourteenth year when I fell for my first love. He looked at my tartan skirt and sweat-stained white shirt and called me mature; I didn't know it then, but that was when I fell.

Spring, in New Zealand's terms. I should really say autumn, or perhaps later-summer, because in Tokyo it would still be unbearably muggy deep into October, during the goodbye kisses of the typhoon season. In Kyoto it would be sunny enough to punish those of us who thought sunblock would give us pimples. Nevertheless, though the moment fell in Kyoto, it was a spring sort of love, and we tumbled through the New Zealand-spring-Japan-autumn to rush towards the Pohutukawa-Christmas and claim it as the summit of our affair, marking spring as our first baby-steps towards it. Perhaps we were jet-lagged.

The inception of our love placed itself during the first weekend of this Japan Trip, when me and the other students had left our host families behind in Tokyo and bullet-trained to the old capital. I wheedled myself into the supervising team's conversation to joke about the amount of Facebook likes on our profile pictures, to reveal my impressive multicultural upbringing and show my keen interest in his, and to see his slightly surprised, slightly intrigued appraisal of me as he slipped me the words like they were a secret birthday party invitation. I humbly accepted; *mature* was a compliment I was familiar with.

Mature: when I was still oily outside my T-zone and helmet-haired, the 'little waiter' at my parents' dinner parties; when I still played with my older brother's copy of *Naruto: Shippuden* in the weekends, and *Pokemon: Diamond and Pearl* in the holidays; when I watched anime like *Attack on Titan*, read

manga like *Hirunaka no Ryuusei*, and sang along to comedy voiceovers from Youtube with my best friend as if knowing every inflection would win us a medal. That last one I did in front of him early in the trip, hoping to impress him. Later, in bed, he told me he thought that was the one time I seemed immature. Figures.

In Kyoto we walked in lines, prising open gift shops and shrines, and gathering attention as we went. Seven girls and seven boys in uniform, marched through streets by four very Caucasian adults. There was Mr H, later known to me as Oli, from our quasi-brother school in Miramar, who had the task of corralling the boys; Joe and Leo, recent graduates of that same school and our laid-back teacher aides; Mr L, or Sean, our Kiwi-Japan link and live-in tour guide; and Mrs V, from our actual brother school, whose job was to steal joy and spread unhappiness, it seemed. We were never permitted to use her first name. Mrs V was the most conspicuous of our supervisors, with her scowling pale skin, cold blue eyes, and tawdry yellow hair (probably bleached and blow-dried). I suppose she could be called my eventual saviour, in retrospect, but at the time I considered her the villain: an undercover Umbridge. Excluding her, everyone on the trip had friended each other on Facebook by the end of the first week.

And then there were the fourteen of us students; cool kids and nerds, girls and boys, mixed and mingled until we were as familial as pubescent teens could be. The rabble included my two enduring best friends: supportive Cam and motherly Elaine. In Kyoto the three of us fought for room arrangements, moved mattresses to slumber party together. When let loose in the *Sanjo-kai Shōtengai*, we rushed

in the baking heat to show each other only-in-Japan knick-knacks.

Cam had already developed a crush on one of the Miramar boys by this time (I say, having already frothed over a teacher on the first day). He was (and still is, I imagine) a sweet, funny, and tall boy, who incidentally also had a hankering for anime and manga. In one of the shōtengai arcades, the Cam and I stalled, cheering on his attempts to acquire a *Captain* Levi figurine from a claw machine. The stalling made us late, so we panicked and ran through the market in a frenzy, lost in its labyrinthian aisles—or perhaps that was the version of the story we had decided on. Sometimes, often, I find it easier to remember what I said in the past, rather than what really happened. Either way, Mrs V was livid. Oli looked unimpressed, and though I must have been a major contributor to our construction of an excuse, imaginative and quick-thinking as I always am, I could only profess that I was sorry, Sir, and bow my sweaty brow in shame. I remember this story, I think, because Cam's boy crush gave me that *Levi* figurine. These are my only two memories from Kyoto.

YEONGHEE SEO



JEFFREY PAPAROA HOLMAN

ンエフリー・パパロア・ホーマン



ジェフリー・パパロア・ホーマン

バイオ

ジェフリー・パパロア・ホーマンは、クライストチャーチの詩人、ノンフィクション作家です。2017年に詩集『Blood Ties: selected poems, 1963-2016』(カンタベリー大学出版)、2018年に回顧録『Now When It Rains』(スティール・ロバーツ社)が出版されています。2011年には日本を訪れ、1945年4月に先島群島沖で父親の戦闘機を積んだ空母HMSイラストリアスを攻撃して死亡した2人の神風特攻隊員の遺族に面会しています。永田家(九州鹿島町)と西田家(大阪)は、著者と同様にこの出会いに深く心を動かされました。この巡礼物語『The Lost Pilot』(ペンギン・ニュージーランド社)は2013年に出版されました。2021年には新しい詩集『After Hours Trading and the Flying Squad』がCarbide Pressから出版されました。

謝辞

詩「英霊」は以下の本に収録されてる。『The Lost Pilot』(ニュージーランドペンギン出版社、2013年) 『Blood Ties: New and Selected Poems, 1963–2016』(カンタベリー大学出版、2017年).

英霊

選ばれし家の静寂の中に弾痕が残る

出陣した神風たちの白黒写真

悲劇は深く隠蔽され

あなたには見えない

カラスの鳴き声は聞こえないが

悲劇の音を捉えるのは可能なのか

もしかしたらこの腰が曲がって年老いた女の中に 見出すことが出来るのか

女の骨は蛋白質不足の貧しい食事で内側から滑 らかに磨かれている

ある家には

年老いた天皇の写真

神社の裏で風呂敷に包まれた

儀式用の日本刀

さやの中に収まった黄金桜のやいば

確実に刀は振り下ろされ

悲劇の声が夜中に鳴り響いたが

それがどこから来るのか

誰も知らない

Jeffrey Paparoa Holman

BIO

Jeffrey Paparoa Holman is a Christchurch poet and nonfiction writer. His collection, Blood Ties: selected poems, 1963-2016 was published in 2017 (Canterbury University Press); a memoir, Now When It Rains, in 2018 (Steele Roberts). In 2011, he travelled to Japan to meet the families of two kamikaze aircrew who died attacking his father's aircraft carrier, HMS Illustrious, off the Sakishima Gunto in April 1945. The Nagata family (Kashimamachi, Kyushu) and the Nishida family (Osaka) were deeply moved by this encounter, as was the author. The story of his pilgrimage, The Lost Pilot (Penguin New Zealand) was published in 2013. A new collection of his poetry, After Hours Trading and the Flying Squad was published in 2021 through Carbide Press.

ACKNOWLEDGEMENTS

Poem 'The departed' previously published in *The Lost Pilot* (Penguin, New Zealand, 2013) and *Blood Ties: New and Selected Poems*, 1963–2016 (Canterbury University Press, 2017).

The departed

there are bullet holes in the silence
of certain selected homes
black and white photographs
of departed kamikaze

grief for them is hidden deep
you cannot see it from the street
not even in the cries of the crows
is it possible to trace that sound

only perhaps in this old woman
who passes bent beneath
a protein deficiency in her bones
shined hollow by a life of rice and fish

in one house in particular
there will be a portrait of the old
emperor and in another wrapped
in cloth behind the shrine a ceremonial
sword its golden sakura blossoms disguising
the blade asleep within the scabbard

there are certainly sword strokes and sobbing deep in the night but impossible to tell from where they come

JEFFREY PAPAROA HOLMAN



CARL SHUKER

カール・シュカー



カール・シュカー

バイオ

カール・シュカーは5冊の小説の作家でそのうちの2冊は日本で書かれた。シュカーは2000年、2004年に東京に居住し、2008年にアーティストインレジデンスの資格を得た。彼は長年にわたって日本を愛し、特に日本食、日本人と若い外人との関係、17世紀江戸幕府による鎖国下において宣教師とオランダ人商人と日本との歴史について関心を示している。

謝辞

抜粋:メソッドアクターズ (Shoemaker & Hoard, 2005年)

そして札幌風鍋のせいで何かしらの行動を起こさな くてはならない事態になった。

モントリオールから来た船から颯爽と降り立った時18歳のジョナサンドゥビュクは、3つのパートに分かれた非常に難しい入学試験をパスし、同時に返金不可の入学金、学費、ラボラトリー費用を払い終わり、1994年立教大学への入学を許可された。ヤスの担当教授前田は、ジョナサンの学校や東京、日本食、そして化学の勉強に必要な、罰ゲームかと思えるような量の漢字を覚える手助けのために、ヤスをジョナサンの世話係に任命した。聡明な前田先生はバディシステムはヤスを英語嫌いと被害妄想に陥る事を未然に防ぐ効果もあると期待していた。

しかしヤスは前田先生の(過去を振り返ると間違 いだった)指示をただ受けいれただけで、英語話 者のカナダ人生徒になんの期待もしていなかっ た。一方ジョナサンもその提案を受けいれた、何 故ならこの時点で彼は日本語テストのスコアをご まかしていたからだ。(具体的に言えば、ジョナサ ンは日本語テストのスコアをレベル1と申請して いた。日本語能力試験一級は上級者しか取れな いレベルで、漢字2000字、語彙一万語、そして900 時間勉強を必要としたが、実際のところジョナサ ンは手練れの細工者で、認定証をフォトショップ で偽造していた。)彼はただモントリオールと、4年 間の学費と生活費を出してくれると約束した、カト リック司教の非常に厳格かつ彼に鞭打つ父親か ら逃げたいだけだったし、この時点で彼は日本に 来てたったの1週間しか経っていなかった(前田と その他の教授達は日本語のオリエンテーションで 全ての事に物静かに頷き彼らに敬意を払っている かのようにみえたジョナサンの態度に好感を持っ た)。ジョナサンがバディシステムを受け入れたの は少ししか寝ていなかったし、言われたことを理 解するのに彼には助けが必要だったからだ。

しかし、それも長くは続かなかった。ジョナサンに 関する全てのことは完全に辻褄が合わなくなり事 態は悪化していく運命のように感じられた。最初の兆候は、彼が選んだ滞在先だった。キミ旅館と言う1泊4500円程の観光客用の安宿で西池袋にある立教大学が数区画離れた場所にあった。一か月にかかる宿代は平均的な外人ハウスの二倍もし、学生にはとんでもなく高い家賃に思われた。しかしこれについては 一もちろん誰も聞きはしなかったけどー もし誰かがなぜそんなに高い家賃を学生の身分で払っているのか尋ねていたのなら彼は答えたのだろうけど。

そういうことで授業が始まった。最初の数週間は、1日5時間授業の週6日授業だった。ジョナサンは授業中真新しい無印良品のホルダーを静かに引っ掻いていた、一度も顔を上げず、全く言葉も発さず、講師との接触も避けているようだった。ヤスは指示通り週に2コマの授業中だけ彼の横に座りまだ一度もジョナサンの声を聞いていなかった。しかしジョナサンは肘で隠れてはいたものの、沢山ノートを取っているようだったし、90分の授業が終わるとなるべく早くしかし目立たないようにクラスを出て行った。彼はホルダーを閉じ、ヤスとクラスの外で会った。その間ジョナサンは免税店で買ったジタン(フランスのタバコの銘柄)を吸い、二人の間に会話は全くといって無かった。

しかし綻びが生じ始めた。ジョナサンについて漠然とした噂が学期の中ほどに差し掛かった頃大学の化学部門で広まった。噂とは、彼は西池袋の怪しい場所に、みすぼらしい恰好で夜な夜な出入りしているのが誰かが見た、というものだった。ジョナサンが真夜中汚い白いスピードの競泳水着だけを着て噴水の中を歩きながらカトリックの教理問答を唱えているのを見た人がいると聞いたと報告した者もいたし、幽霊だとかクスリとやってるとかという者もいた。

そしてある朝、一年目の生物のクラスと外国人生徒用の日本文化を学習するためのチュートリアルの間に、何かしらの行動を起こさなくてはならない事態になった。強いセブンスターの煙をせわしなく吸い込み、18歳のカナダ人学生ジョナサンドゥビ

ュクは重度のカルチャーショックと完全崩壊の真っただ中にあり、彼のバディである若い菌学専攻のヤスを、フォーマルかつカタコトの日本語で、早めのランチに誘った。

ヤスは衝撃を受けて、「だけど、、、、チュートリアルは どうするの?」と言った。血走った目と人目を忍ん だ様子で、ジョナサンは入念にリハーサルした招 待の言葉を丁寧語でただ繰り返しただけだった。

こんなことを言うのもなんだが、自分の人生の中で初めてこんなにも丁寧でへりくだった言葉で何かを言われた事が無かったので、単純にヤスはランチの誘いを断れなかっただけだった。ジョナサンが慣れた素振りでヤスを連れて入ったみすぼらしい小さな居酒屋で注文したものが運ばれて来るまで、ヤスはガイジンジョナサンの行動について何も不審な点を見出してはいなかった。ヤスは緑茶と焼き鳥を注文し、ジョナサンは驚くべき無関心さで生ビール大を注文し、適当にメニューを指し注文したが、それがヤスにはジョナサンがカッコよく振舞っているだけなのか、心ここにあらずの状態なのか分からなかった。

彼はまた煙草に火をつけ背筋をまっすぐ伸ばして 座っていたが、ビールが運ばれて来るまで足を小 刻みに揺らしていた。彼は無意識に生ビール大の 半分を一気に飲み干していた。素朴なヤスはまだ ガイジンジョナサンのトラウマについて想像すらし ていなかった。カナダ人はアサヒを飲み干し、カエ ルのようにゲップをしながら「すみません!」と店員 を呼んだ。

彼はビールをもう一杯注文した。

ヤスは待っていた、そして彼はランチタイムに大酒を飲むのは習慣の違いだと考えた。ヤスはイギリス人もそうすると知っていたのでカナダ人もそのリストの追加した。

しかし悟りの瞬間が来た。店員がジョナサンに向かって横目で曖昧な親密さを示しながらランチをテーブルに置いた時、ジョナサンは自分を見失い、絶望し、パニックに陥ったようだった。

マッチと着火用燃料が入った受台の上に乗った熱々の小さな鉄板が札幌風なべとしてテーブルに到着した。鉄板の上には生の牛肉とキャベツが乗っており、ジョナサンが自分の箸で混ぜたりひっくり返したりし均等に火が通るよう、自ら調理しながら食べる方式だった。肉は ーピンクで脂肪が多く親指大の筋が入っていたー 平たい小さな鉄板の上に山積みになっていて、よくある鍋料理とは違って鍋もだし汁もないが札幌風鍋の調理は普通とてもうまくいく。肉の量は正確に計算されていて、キャベツは肉の上で蒸され、肉汁が鉄板からあふれ出すこともない、食べる前にちゃんと火が通っているかどうか確認することぐらいで特別何かする必要はなかった。

若いカナダ人が燃料に火を付けず、火の通り具合を全く確認せず(火のついたセブンスターを片方の指で挟みながら)生肉をガツガツ食べ始めたのを見たとき、ヤスは何か変だぞとようやく気付いた。

Carl Shuker

BIO

Carl Shuker is the author of five novels, two of which are set in part in Japan. Carl lived in Tokyo in 2000, 2004, and took an artist's residency there in 2008. He has had a long love affair with the country, in particular the cuisine, the relationship of young gaijin living in Tokyo with the Japanese, and the history of Japan's contacts with missionaries in the 17th century and Dutch traders during the subsequent centuries of seclusion.

ACKNOWLEDGEMENTS

Extract from *The Method Actors* (Shoemaker & Hoard, 2005)

And things more or less came to a head over Sapporo-style nabe

So when Jonathan Dubuc, an eighteen-year-old fresh off the boat from Montreal, was admitted to Rikkyo University in 1994 after the threepart, cripplingly difficult entrance exams had been passed, and the equally crippling nonrefundable application, admission, tuition and laboratory fees had been paid, it was Yasu's professor Maeda-san who suggested the buddy arrangement with Yasu, who could ease Dubuc into school and Tokyo and Japanese food and the hours required to absorb the punishing number of kanji required to study chemistry in Japanese. The sagacious Maeda foreseeing this buddy system as also having the effect of preventing Yasu sliding into paranoia and a lifelong aversion to the English language.

Yasu agreed, more out of deference to Maeda's (retrospectively bad) judgment than any particular desire for an English-speaking Canadian pal. Dubuc agreed too, because, at this point, having lied about his proficiency test (he'd claimed the prerequisite Level 1: Advanced: 2,000 kanji, a vocab of 10,000 words and more than 900 hours' study-the fact was that Dubuc, a better forger than he was or ever would be a language scholar, had altered his certificate with Adobe Photoshop) to get away from Montreal and his Catholic bishop and super-strict and son-beating dad who had nonetheless financed the first of four years at Rikkyo (with allowance), and Dubuc at this point having been only one week in Tokyo (Maeda and the professors at his orientation putting his quietness and constant nodding down to nerves and an endearing enthusiasm for all things Japanese, including deference to one's superiors), the young Canadian agreed to

CARL SHUKER

be buddied because he was both sleeping very little and doing anything he could understand of all he was being told.

But that didn't last long.

And nothing at all about Jonathan Dubuc seemed to quite add up or feel destined to last very long. The first clue was the accommodation he had chosen. Dubuc had set himself up at Kimi Ryokan, a budget inn for tourists, just a few blocks from Rikkyo on Ikebukuro's west side and a single room at the Kimi cost around ¥4,500 a night, so per month his rent worked out at roughly double that of a standard gaijin house. Impressive for a student.

But this—although, of course, no one ever raised the matter—could have been explained away.

So then there was class. For the first few weeks, sometimes up to five hours a day, six days a week, he sat in lectures silently scribbling in a new Muji folder, never looking up, never offering a word, never offering an easement for a lecturer to call upon him. Yasu sat beside him in only two classes per week, as a favor, and never once heard him speak. But Dubuc seemed to take copious notes, carefully shielded by an elbow, and the instant the ninety minutes were up and it was polite to leave, he'd clap his folder shut and meet Yasu outside, where he'd smoke duty-free Gitanes until next class so furiously there was no opportunity for conversation.

Cracks began to show.

Vague rumors began to circulate in the Chemistry Department some weeks before midterms. Rumors that Dubuc had been spotted entering and leaving in different states of disrepair some less than salubrious nightspots in West Ikebukuro. That someone reported someone else had seen him wading in the fountains of the plaza late at night reciting

a Latin catechism in just a pair of stained white Speedos. That he was a ghost. That he took drugs.

And things more or less came to a head one morning when, between a first-year bio lecture and a tutorial for foreigners on Japanology, between furious puffs on dizzyingly strong Seven Stars cigarettes, 18-year-old Canadian Jonathan Dubuc, in the midst of massive culture shock and a general meltdown, invited his university Buddy, the young mycology student Yasu, to an early lunch in very formal stilted Japanese.

Yasu, more than a little shocked, said, "But... what about the tutorial?"

Bloodshot-eyed and furtive, Dubuc simply repeated the carefully rehearsed invitation, honorifics and all.

Put this way, and really the first time in his life someone had addressed him in such flattering and respectful language, Yasu just couldn't refuse. But still, his first real suspicion that something might well be wrong in the alien world of Dubuc didn't come until their food arrived at the seedy little izakaya that Dubuc had quickly and unerringly led him to. Yasu ordered some yakitori and green tea; Dubuc ordered a large draught beer with impressively dismissive familiarity, then tapped a finger randomly on the menu with what Yasu wasn't sure was either extremely classy or somewhat worrying indifference.

Dubuc lit yet another cigarette and sat in erect silence, one epileptically tapping foot aside, until his beer arrived. He downed half the glass in one prolonged, unselfconscious swill. Naive Yasu remained unconvinced of any kind of trauma in the world of Dubuc. The Canadian downed the rest of his Asahi, and croaked out "Sumimasen!" to the waitress through a burp.

He ordered another.

Yasu waited. Prepared to put lunchtime binge drinking down on his expanding list of cultural differences. He'd heard about the English, after all.

But the moment of epiphany came—that Dubuc might just be lost, desperate, freaking rapidly out—when, by a waitress who showed some equivocal familiarity with the boy (a sidelong glance; a nasal sigh), their lunch was served.

Dubuc had randomly ordered Sapporostyle nabe.

Nabe Sapporo-style arrives on the table as a box of matches and a miniature hotplate on three stilts mounted over a small sterno. The hotplate is piled with raw beef and cabbage, the idea being that the diner supervises the cooking of his own dinner, stirring and turning the meat with his hashi to cook it evenly. And although the meat-pinkish, fatty, in gristly blobs as big as fingers—was piled high on the flat little hotplate, and there was no bowl or broth as per regular nabe, Sapporostyle usually works very well. Somehow, the amount of meat is calculated precisely that it cooks in its own juices without overflowing the hotplate's little rim, steaming the cabbage above, and usually without requiring any more than a minimum of attention.

Yasu knew that something was up with the young Canadian when he didn't light the sterno and, with a minimum of attention, began (with the fingers of one hand; Seven Stars still burning in the fingers of the other) to wolf the meat down raw. CARL SHUKER



JOHANNA AITCHISON

ジョアナ・エイチッソン



ジョアナ・エイチッソン

バイオ

ジョアナ・エイチッソンは学校法人創志学園がパーマストンノースに所有するIPUの教師である。エイチッソンは北海道の江刺町に2002年から3年間ALTの教師として勤め、その間和同流空手の黒帯を獲得し、スノーボードを楽しみ、よさこいのダンスグループにも参加した。2007年と2015年に出版されたエイチッソンの2冊の詩集は日本で暮らした日々に着想を得ている。エイチッソンは現在マッセー大学にてクリテイティブライティング博士課程に在籍している。アイチソンはマッセー大学のクリエイティブ・ライティングの博士課程を修了したばかりです。

謝辞

「ミスレッド イン ジャパン」は『Best New Zealand Poems 2007』(The International Institute of Modern Lettersによってオンラインで公開)に掲載され、『a long girl ago』(Victoria University Press, 2007年)は『The Montana New Zealand Book Awards』と『The Best of Best New Zealand Poems』(2011年, Victoria University Press)の最終候補に残った。

「日本の子供達からの手紙」は江刺北中学校の生徒から送られた寄せ書きから構成されている。この詩は『a long girl ago』と同じく『Essential New Zealand Poems: Facing the Empty Page』 (Random House, 2015年)に掲載されている。

ミスレッド イン ジャパン

私は自分の骨に

電話をかける

12年前のビデオを

観て夜を過ごす

黒いカラス

電線の上 光る

嘴と葉っぱの窓枠の中

子供の頃の家は

コーヒー缶、フライパン

リビングの床にころがる

母はモーリッツ棒

ストーブは乾燥した海草の一切れ

夜 母に

黄色い固いヘルメットをかぶせる

'お父さんおやすみ'とよびかける

道路は踊る

暗闇の中

ホープに敬礼

シガレット

宇宙の光に包まれて

道路脇の機械たち

日本の子供達からの手紙

親愛なるジョアナ様 大変楽しい授業でした 寂しいけど、ベストを尽くします きっと悲しい気持も忘れると思います

大変楽しい授業でした あなたはいつも大声で話し笑っています きっと悲しい気持も忘れると思います ボーイフレンドを作って幸せになってね

あなたはいつも大声で話し笑っています ときどき私たちと楽しく踊りました ボーイフレンドを作って幸せになってね ときどき「ゆうすけ!」と僕を叱りましたね

ときどき私たちと楽しく踊りました さよならは言いたくないけど言わないといけない ときどき「ゆうすけ!」と僕を叱りましたね 本当のことを言うともっと一緒にいたい

さよならは言いたくないけど言わないといけない あなたがペンを噛む癖があることをきっといつでも思い出すでしょう 本当のことを言うともっと一緒にいたい これで最後なのかな?

あなたがペンを噛む癖があることをきっといつでも思い出すでしょう 寂しいけど、ベストを尽くします これで最後なのかな、 ジョアナさん?

Johanna Aitchison

BIO

Johanna Aitchison is a lecturer at IPU New Zealand in Palmerston North, which is part of the Japanese-owned Soshi Education Group. Aitchison lived in Esashi-cho, Hokkaido, as an ALT teacher on the JET Programme from 2002 to 2005, during which time she attained her black belt in wado-ryu karate, learned to snowboard, and joined a yosakoi dancing group. Many of the poems in Aitchison's last two poetry books, a long girl ago (2007) and Miss Dust (2015), were inspired by her time in Japan. Aitchison has just completed her doctorate in creative writing at Massey University.

JOHANNA AITCHISON

70

ACKNOWLEDGEMENTS

'Miss Red In Japan' was previously published in: Best New Zealand Poems 2007 (published online by the International institute of Modern Letters), a long girl ago (Victoria University Press, 2007) which was a finalist in the Montana New Zealand Book Awards and The Best of Best New Zealand Poems (2011, Victoria University Press).

'Letters from Japanese Kids' is a found poem made up of goodbye letters from students at Esashi-Kita Chugakko (primary school). It was previously published in *a long girl ago* as well as *Essential New Zealand Poems: Facing the Empty Page* (Random House, 2015).

Miss Red In Japan

I make telephone calls to my bones, eat evenings full of 12-year-old video credits.

Crows snap black
on power lines, shine
beaks inside my leaf window.

My childhood home is coffee cans, a frying pan on the living room floor.

Mum is a Moritz stick.

The stove is a piece of dried seaweed.

At night I cover mother in a yellow plastic hard hat. 'Goodnight dad,' I call out.

The road is dancing. In the dark I salute packets of HOPE cigarettes inside spacelight roadside machines

Letters from Japanese Kids

Dear Ms Johanna
I very enjoyed your class
I am lonely, but I do my best
I could forget bad feelings

I very enjoyed your class
You are always smiling and talking in a loud voice
I could forget bad feelings
Get a boyfriend and have a happy life

You are always smiling and talking in a loud voice Sometimes you danced with us so kindly Get a boyfriend and have a happy life Sometimes you scolded me, 'Yusuke!'

Sometimes you danced with us so kindly I don't want to say goodbye but I have to Sometimes you scolded me, 'Yusuke!'

To tell the truth I need more time to spend with you

I don't want to say goodbye but I have to
I'll always remember that you have a habit to bite your pen
To tell the truth I need more time to spend with you
Is this the end?

I'll always remember that you have a habit to bite your pen I am lonely, but I do my best Is this the end,
Ms Johanna?

JOHANNA AITCHISON



COLLEEN MARIA LENIHAN

コリーン・マリア・レニハン



コリーン・マリア・レニハン

バイオ

コリーン・マリア・レニハンは、ニュージーランドのオークランドを拠点とするマオリ作家です。東京に15年間住み、その間、イベントプロモーター、ビデオグラファー、英語教師として働いていました。彼女のデビュー短編集『Kōhine』は、日本を舞台にした物語が数編収録されています。現在は映画や舞台の脚本執筆に力を注いでいます。

謝辞

『Kōhine』より抜粋 (Huia Publishers, 2022)。

グノシエンヌNo.1

太陽の光が降り注ぎ、埃がアメーバのように部屋中に漂う。壁には本や楽譜、レコードが並び、畳の上には木製のケースが置かれ、不安定な状態で積み上げられている。床の間には、黒い漆塗りの神棚の上に、手描きで補修された写真が2枚飾られている。

由紀は、官能的でジャジーなアレンジで演奏している。まだ2回目の挑戦だから鍵盤を叩くのに手こずっていてもそこはご愛嬌。ようやく曲の雰囲気がつかめてきたみたいだ。トーチシンガーのように目を閉じて、意外にもハスキーな声で哀愁を漂わせながらサビに入る。

普段はJ-POPを嫌っているあなたは、中島美嘉のこの曲はとても魅力的だと認めざるを得ない。あなたは由紀が10歳のとき一家で東京に引っ越してきたときから彼女にピアノを教えている。彼女の母親は京抹茶の手土産を持ってあなたを訪ね、渋谷区で一番のピアノ講師と評判のあなたに由紀を指導してもらえないかと依頼したのだった。

冬の日差しが由紀の艶やかな黒髪を揺らし、その 肩は上下している。いつものように白いブラウスに おしゃれを意識してチェックのスカートを短めに着 こなしルーズソックスを履いている。彼女が歌うの は英語で嘆願する最後の一行だ。

「プリーズ......プリーズ......

音符が宙を舞う。あなたは拍手をしながら彼女の ところへ歩いていく。

「素晴らしい、由紀ちゃん」

彼女は首を振る。

「いえいえ、浜崎先生。間違いだらけだよ」。

「そんなことないよ」。

「親友がカラオケでこれを歌うんだよね。先生と同じビルに住んでるよ」。

由紀は学校指定のカバンを肩にかけ、一礼してさよならを言う。彼女が出て行くとき、バンビのような

長細い脚や軽やかに揺れる腰を見て思う―これ こそが今から花咲こうとする若い娘なのだ。あな たは萌えを感じる。いやらしい意図はなく、成長を 見守るような気持ちで。

スーパービュー踊り子号は見た目は新幹線と似ているが、窓が広くゆったりとした速度で走るのが特徴だ。東京から伊豆に向かう時左側に座ると、太平洋が眼下に広がり遠くには大島を望む。サーフボードは下田の定宿に既に送ってある。キャンバス地のダッフルバッグにはフル装備のウェットスーツが入っている。車内販売のカートがガラガラと音を立て通り過ぎていく。駅で買った弁当に合わせてキリンビールを注文する。好物のジューシーな生姜焼きを夢中で貪る。目の前の席の家族は窓側に座っている。父親は幼い娘に漁船を指差す。彼女のぽっちゃりした手が空中で円をなぞる。あなたはかつて自分を愛した女性、ナタリーのことを考える。もし彼女が高級車の車内で隣に座っていたら、俺はなんと言っただろうか。

「今まで見た中で一番綺麗なものは何だった?」

自分の答えは分かっていた。噴火しているハワイの火山。ハート型の顔と短く切ったブロンドの髪を 持つナタリーは、少し考えてからこう言っただろう。

「あなたね」

白い風見鶏のゲストハウスの前でタクシーを降りる。家は2軒並んでいて、2階建てで4つのユニットがある。色あせた看板には「AZUL BEACH SIDE CONDOMINIUM」と書かれている。着古したタイダイと迷彩のクロックスを履いた年配サーファーでもあるオーナーのアベさんが出迎えてくれた。彼は2階のマッターホルンの写真が額に入っているいつもの部屋の鍵を渡してくれた。ドアの前ではサーフボードが主人の到着を待ちわびていた。ナタリーがストラップシューズを脱ぎ捨て、子供のようにベッドの上で飛び跳ねていたのを思い出す。息が切れて枕に倒れ込むまで一緒になってはしゃいだあの頃。

ジャックダニエルのコーラ割りを飲みながら、暗くなるまでバルコニーでタバコを吸う。

次の日、ナタリーが「ドーンズ・クラック」と呼んでいた時間に早起きした。オーストラリア人とのデートで英語が上達することを期待していたのだが、英語はまだすごく下手だった。バルコニーでコーヒーを淹れて飲む。あなたは波を見つめている。薄明りの中、砂空海は荒い白黒写真のような質感のストライプをなす。

ビーチは閑散としている。この時期は閉鎖されているのだ。あなたはルールを破っているのだが、地元の人たちは少数の熱心なサーファー達が冬になっても波乗りに来る事など気にしない。伊豆の人はそんな感じでのんびりしている。東京を離れて人の群れや同調圧力から解放されるとホッとする。サーフボードを持って浜辺に出て大きく深呼吸をする。空は真っ白で海は灰色だ。寂寥感が気分を高揚させ、思わず海に向かって走ってしまう。凍てつく水に目が覚める。寒さに負けて岸に戻ってしまわないように動き続けなければならない。ボードに飛び乗り、波をかきはじめる。

フラットな海面。凪。その中にあって完全に一人だ。背後の荒れた海岸には霧のかけらがまとわりつき、不気味や不安を覚える。思わず海に掛け合う一溺れさせたり、殴ったりするんじゃねえぞ。トラブルはごめんだ。遠くに黒い塊が見える。潮流が作った波を捕らえる完璧なポジションを求め、海面をかきながら行きつ戻りする。

温泉の湯気の中に身をゆだねながらふうーっと一息。一瞬、世界で一番ラッキーな男になったような気がする。「タトゥー禁止」のサインを見て、前腕の内側にある小さなタトゥーをタオルで隠す。ナタリーとタイで酔っ払った時にお互いのイニシャルを入れたのだった。次の日彼女はゲラゲラ笑って『ウィノナ・フォーエバー!』と言った。彼女はあなたに時々ガイジンになりたいと思わせた。深く考えずノリで喋ってればよかったんだ。ナタリーが一緒にヒノキの浴槽に青白い肌を首まで浸かっていて、緑の瞳を輝かせているなら。瞳の色は天気や彼女の気分によって変わった。乳白色に輝くにごり湯は、ナタリーの瞳の色をおそらく明るいグレーグリーンに変化させただろう。彼女はどこにいる?今何

をしているのだろう?かつて人生の中心だった女性は今ではあずかり知らない他人になってしまった。これを最後にナタリーを自分の心から追い出そう。あなたはすべてのSNSで彼女をブロックし、携帯電話からナタリーに関する全ての過去を削除する。

4日間同じルーティンの繰り返し一夜明けとともに起きコーヒーとタバコ、凍えるまでサーフィン、癒しの湯に浸かりマッサージチェアで居眠り、浴衣とスリッパで部屋に戻り村上春樹の「ノルウェイの森」を読み返し、デッキで深夜までジャックコークを飲む一。

**

お気に入りのラーメン、地元の居酒屋で飲む冷たいビール、ピアノが恋しくなり東京へ戻る電車に乗った。生徒たちに休みはどうだったか聞くのが楽しみだ。代官山駅に降り立つ。外はいい天気だ。若いお洒落なカップルが自分たちの服装のチョイスに満足した様子で通り過ぎていく。彼らは屋外のカフェに溜まっている。バギーに乗せられた黒いフレンチブルドッグに微笑みかけると犬も微笑み返してくる。住んでいるアパートは駅から徒歩1分のところにある。エッグサンドとホットのロイヤルミルクティーを買うためにローソンに立ち寄った。アパートのドアに手書きのメモが貼られている。

浜崎さん 渋谷警察までご連絡ください 03-3498-0110

え?もう一度読む。心臓がバクバクする。メモを取り、ドアの鍵を開け、玄関にバッグをどさっと置く。 泥棒に入られたのか?窓は割れていない。侵入された形跡はないかと目を凝らすが、室内が荒らされた形跡もない。メモに書かれていた電話番号にダイヤルすると、女性が振山刑事につないでくれた。

「1月1日、あなたのビル「代官山ロイヤルコーポ」 の4階に住んでいた外人さんが、バルコニーから 飛び降りて一階にある浜崎さんの裏庭に落ちまし た。留守中に警察や救急隊員が入らせて頂きました。ご迷惑をおかけしました。|

「え!?ほんとうですか? でその人は大丈夫だったんですか?」

「彼女、亡くなりましたよ。高校生でした。とても残念です。」

電話を切る。煙草に火をつける手が震える。祖母の写真を見てその穏やかな表情で気持ちを落ち着かせようとする。庭に出ると木製のフェンスが壊れていた。青みがかった黒いカラスがその上にとまっている。カラスもコンクリートについた血を一緒に見ている。少女が飛び降りたバルコニーを見上げると思ったよりも高いところにあった。

祖父が使っていた銀色のジッポで数本の線香に 火をつける。1月の冷たい空気の中、太い白い煙 が巻き上がり、沈香やベンゾインの香りが漂う。少 女が落ちた場所に手を合わせる。あなたは少女と その両親のことを考える。自分の両親のことを考 える。彼らの両親のことを考える。幼少期のペット、 モチのことを考える。ピアノの師匠である加納先 生のことを考える。生徒の由紀ちゃんのことを考え る。ナタリーのことを考える。

線香の煙が服にまとわりつき家の中に一緒に入ってくる。積み上げられた楽譜の中からサティを探し出しピアノの前に座る。彼の奇妙な楽譜には、「単調で白く」「とても輝いて」「遠くから」演奏するよう指示されている。演奏を始めるとメロディーは部屋から庭に滑りだし、しばらく煙と一緒に渦を巻きそして上へ、上へ、上へ、大気の中へ舞い上がっていく。

Colleen Maria Lenihan

BIO

Colleen Maria Lenihan is a Māori writer based in Auckland, New Zealand. She lived for fifteen years in Tokyo, and over that time worked as an event promoter, videographer and English teacher. Her debut short story collection, *Kōhine*, features several stories set in Japan. Her current focus is scriptwriting, for screen and stage.

ACKNOWLEDGEMENTS

Extract from Köhine (Huia Publishers, 2022).

GNOSSIENNE NO. 1

Slabs of sunlight fall, dust motes float like amoeba across the room. Books, sheet music and vinyl records line the walls, cover the tatami in wooden cases and teeter in precarious stacks. In the tokonoma, a pair of hand-tinted photographs hang above a black lacquer shrine.

Yuki is playing a sensual, jazzy arrangement. It is only her second attempt, so you feel goodnatured and forbearing about her fumbles on the keys. Finally, she gets a feel for the piece. She closes her eyes like a torch singer and launches into the chorus, her surprisingly husky voice plaintive.

You usually detest J-pop, but you have to admit this piece by Nakashima Mika is quite charming. You have been teaching Yuki piano since she was ten, when her family first moved to Tokyo. Her mother called on you with a gift of green tea from Kyoto, saying she'd heard you were the best piano teacher in Shibuya-ku and would you please look upon her favourably and take her Yuki on?

The winter sun rings Yuki's glossy black bob; her shoulders rise and fall. As always, she is in school uniform: white blouse, check skirt fashionably shortened, baggy white socks. She sings the last line, which pleads in English:

'Please ... please ...'

The notes hang in the air. You walk over to her, clapping.

'Subarashii, Yuki-chan.'

She shakes her head.

'Ie, ie, Hamasaki-sensei. So many mistakes.'

'Such feeling though.'

'My best friend sings this at karaoke. She lives in your building.'

Yuki slings her schoolbag over her shoulder, bows and says goodbye. As she walks out the door, you take in her long Bambi legs, the COLLEEN MARIA LENIHAN

swing of her hips ... this is a young girl about to blossom. You feel pangs of moe. Not in a lecherous way. More a protective wonder.

The 'Super View' Odoriko train looks like a Shinkansen, but has wider windows and moves at a far more leisurely pace. Sitting on the left for the views of the Pacific below, you see the island of Ōshima in the distance. Your surfboard has been sent ahead to the guesthouse you always stay at in Shimoda. A full wetsuit with booties and a hood is packed in your canvas duffle bag, ready for the chilly typhoon swells due to roll in from the north-east. The train attendant rattles past with her cart. You order a Kirin beer to have with the bento box you purchased at the station. Shōgayaki is your favourite, and you devour the juicy slices of pork. The family seated in front of you are at the window. The father points out the fishing boats to his little girl. Her chubby hand traces circles in the air. You think about Natalie, the woman who had once loved you, and imagine what you'd say to her if she was sitting next to you in the first-class car.

'What's the most beautiful thing you've ever seen?'

You already knew your answer. A volcano erupting in Hawai'i. Natalie, with the heart-shaped face and cropped blonde hair, would think for a second, then say:

'You.'

A cab deposits you outside a white weatherboard guesthouse. There are two houses side by side and double storeyed: four units. A faded sign says 'AZUL BEACH SIDE CONDOMINIUM'. The owner Abe-san, an old surfer in worn tie-dye and camo Crocs, greets you. He gives you the key to your usual room on the second floor, the one with the framed print of the Matterhorn. Your surfboard is waiting for you, at the door. You remember when Natalie kicked off her Mary-Janes and rushed in to jump up and down on the bed like

a child. You'd joined her, until you both fell back on the pillows, breathless.

You fix yourself a Jack and Coke and smoke on the balcony until dark.

The next day you are up early at what Natalie used to call 'Dawn's crack.' You had hoped dating an Australian would improve your English, but it's mada sugoku heta. You brew coffee and drink it on the balcony. Your eyes scan the swell. In the half-light, sand, sky and sea are strips of texture, like a grainy black and white photo.

The beach is deserted. It is closed at this time of year. You are breaking the rules, but the locals don't care about the few die-hard surfers like yourself who still head out in winter. Izu people are relaxed like that. It is a relief to be out of Tokyo, away from the sea of people and crushing weight of collective obligation. You amble onto the beach with your board and take in long, deep breaths. The sky is bone white and the ocean is grey. The spare desolation exhilarates you, and you break into a jog. The freezing water shocks you awake. You must keep moving so the cold doesn't overtake your senses and force you back to shore. You jump on the board and paddle out.

Flat water. A lull. Out there amongst it all, you are totally alone. Scraps of fog cling to the ragged coast behind you, and you catch spooky, sharky feelings. You negotiate with the ocean: don't drown me, or give me a beating. I don't need any trouble. Black lumps form in the distance. You paddle up and down the beach, in search of the perfect position to catch a wave when the set rolls in.

You sigh as you ease yourself into the steaming waters of the onsen. For a moment you are the luckiest man in the world. Eyeing the 'TATTOOS PROHIBITED' sign, you drape a wash cloth over yourself to conceal the tiny inking on your inner forearm. You and Natalie had got each other's initials on a bender in

Thailand. The next day, she'd laughed and said, 'Winona Forever!' She made you want to be gaijin too sometimes. You wouldn't have to think so much before you opened your mouth. You wish she was up to her pale neck in the cypress tub with you, green eyes shining. They changed colour according to the weather and her mood. The opalescent chalkiness of the mineral pool would probably make them a light grey green. Where is she? What is she doing now? She who was once the centre of your life is now an unknowable stranger. You resolve to banish Natalie from your mind, once and for all. You block her on every platform and delete all evidence of the relationship from your phone.

The routine for the next four days is this: up at Dawn's crack, coffee and cigarette, surf until your teeth chatter, soak in healing waters, fall asleep in massage chair, pad back to your room in yukata and slippers, re-read Murakami's Norwegian Wood, drink Jakku Coku on the deck until midnight.

*

You catch the train back to Tokyo, hungry for your favourite ramen, icy cold pints at your local izakaya, your piano. You look forward to seeing your students and asking them about their holidays. You alight at Daikanyama Station. It's nice out. Young fashionable couples stroll past looking pleased with themselves and their choices. They throng the outdoor café. You smile at a black French bulldog being pushed around in a buggy. It smiles back. Your apartment block is nearby, just a minute away. You stop by Lawsons to get a tamago sando and a can of hot Royal Milk Tea. A handwritten note is taped to your door.

Hamasaki-san Please contact Shibuya Police Station 03-3498-0110

Huh? You read it again. Your heart starts to pound. You grab the note, unlock the door,

dump your bag in the genkan. Have you been robbed? No broken windows. You scan for signs of a break-in, but your stacks and piles appear undisturbed. You dial the number on the note, and a woman puts you through to a Detective Furiyama.

'On January first, a gaijin living on the fourth floor of your building, Daikanyama Royal Copo, jumped from their balcony and landed in your backyard. Police and ambulance workers had to enter while you were away. We are sorry for the trouble.'

'Eh! Hontō desu ka? Are they okay?'
'She died. A high school student. It is most regrettable.'

You hang up. Your hands tremble as you light a cigarette. You look upon the picture of your grandmother; an attempt to draw comfort from her serene countenance. You step into the yard and see the wooden fence has been knocked askew. A crow has lit on it, so black it is almost blue. It watches as you see the blood on the concrete tiles. You look up to see the balcony the girl jumped from. It's higher than you expect.

You light several sticks of incense with your grandfather's silver Zippo. Thick white smoke curls up into the cold January air, releasing agarwood and benzoin. Press your palms together and bow. You think of this girl and her parents. You think of your parents. You think of their parents. You think of your childhood pet, Mochi. You think of Kano-sensei, your piano teacher. You think of your student, Yuki-chan. You think of Natalie.

The incense clings to your clothes and follows you inside. You search through the piles of sheet music to find a piece by Satie and sit down at the piano. His unusual notation instructs you to perform 'monotonously and whitely,' 'very shiningly' and 'from afar'. You play and the melody slips out of the room into the yard, whirls for a while with the drifts of smoke, and then floats up, up, up into the ether.

COLLEEN MARIA LENIHAN



JOHN TĀNE CHRISTELLER

ジョン・ターネ・クリストラー



ジョン・タネ・クリステラー

バイオ

ジョン・タネ・クリステラーは、アッパーハットで育ち、幼い頃から趣味で芸術作品を作っていましたが、科学者としてのキャリアを歩みました。科学産業研究局では植物と昆虫の研究をしていましたが、これらの興味から日本アメリカイギリスフランスに長期滞在しました。また、名古屋大学、岡崎の基礎生物学研究所、岡山大学にそれぞれ10ヶ月ずつ滞在し、日本語と日本文化に魅了され陶芸への興味から滞在中に多くの窯を訪れました。現在ジョンは妻のドナとパーマストン・ノースに住んでいます。

謝辞

謝辞:詩は『Fragments from an Infinite Catalogue』(The Cuba Press, 2020) からの選出。

古織物の詩

二千枚の正方型、

古い着物から切り取り手で継ぎ合わせる、

藍の布が語るのは遠い昔のこと。

誰が女性を彩るこの宝物を染め上げたのか

青、青、藍の青。

何度も浸し、濃い青に。

22色の濃淡ー

かめのぞき、うすあい、るり、

くも、おけ、ぬい、いたじめ。

てつ、なす、かち。

有松では、年老いたてばゆびさんが織った 三浦しぼりは、フックを使って、引き抜いて、束ねる。 模様を作るー かのこ、あらし、すじ、ぼし、

松山では、ミツガワさんが機織り、 縦糸と横糸が織りなす魔法の絣牡丹。 京都では、オテアオさんが染料を筆先につける、 型染、筒描が宝を生み出す。 暖簾の裏でキルトは女の私生活を仄めかす。

緑の四角、

藍と濃緑の混色が、

憩いの目を乱す。

日々の営みに感謝し、

お茶碗にご飯をよそい、お茶が注がれる。

寝る前にやること全て完了し、

キルト布団の下に横になると

喜びが日々の苦労を吹き飛ばす。

紙から、藍と綿糸、

型紙から、布とパッチワーク、

詩とキルトが作られる、

寓話と製作。

John Tāne Christeller

BIO

John Tane Christeller grew up in Upper Hutt and while from an early age made art for pleasure, he followed a scientific career. He studied plants and insects at DSIR and these interests took him to Japan, the US, the UK and France for extended periods. He spent ten months each at Nagoya University, the National Institute for Basic Biology in Okazaki, and at Okayama University, at the same time becoming entranced with Japanese language and culture. His interest in ceramics led to his visiting many kilns during his stays. John lives in Palmerston North with his wife, Donna.

JOHN TĀNE CHRISTELLER

84

ACKNOWLEDGEMENTS

Poem from *Fragments from an Infinite Catalogue* (The Cuba Press, 2020).

Fabric Canto

Two thousand squares,
cut from old kimono and pieced by hand,
the indigo cloth speaks of long ago.
Who made these dyed treasures
for the adornment of woman?

The blue, the blue of indigo.

Dip again, again, again, intensify.

Twenty-two shades:

Kame Nozoki, Usu Ai, Ruri,

Tetsu, Nasu and Kachi.

In Arimatsu, old Tebayubi-san wove
Miura Shibori, by hook, pluck and loop.
Making patterns:
kanoko, arashi, suji, boshi,
kumo, oke, nui, itajime.

In Matsuyama, Mitsugawa-san at her loom, peonies from weft and warp unfolded true, kasuri flower magic. In Kyoto, Oteao-san dipped his brush into the dye, katazome, tsutsugaki produce their treasures.

The quilt hints at women's private lives

behind the hanging noren.

Green squares,

an indigo and myrtle blend,

disturb the resting eye.

Celebrate indeed the hundred daily chores,

the rice bowls filled, the tea is poured.

At evening, indoor tasks complete,

joy usurps the daily toil

when we lie beneath the quilt.

From paper, indigo and cotton yarn,

from pattern, cloth and patchwork,

a poem and a quilt are made,

fable and fabrication.

JOHN TÄNE CHRISTELLER





